2014.5

写真:緑の人工芝校庭をのぞむ新「2号館」

銀友

本郷学園同窓会

No.43

～総会のお知らせ～

日　時　2014年　6月　21日（土）　15：00より

場　所　本郷学園６号館２階会議室

Home page Adless

http://本郷学園同窓会.jp & http://www.hongo-gd.net

学園より教育振興資金へのご寄付のお願い

本郷学園同窓会の皆様には、日頃学園をご支援いただき心から感謝いたします。お蔭様で中学、高校とも、外部の皆様方から教育内容の充実した学校として年々、より高い評価を戴いております。

今後とも、建学以来の教育理念に則って社会有為の人材を育てるべく、学園あげて取り組む所存でございますので、ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

学校の教育内容充実、施設整備などの用途を目的に寄付金を在校生の保護者、卒業生の皆様ほか個人、法人を問わず幅広く受付しておりますので、ご案内申し上げます。学校法人への寄付金は非課税扱いになっております。趣旨にご賛同いただきましたうえでご協力賜わりますよう宜しくお願い申し上げます。

（なお、本学園では従来から入学に際し保護者の皆様へのご寄付のお願いは特に致しておりません。）

●お申し込み方法

①学園事務室に寄付の申込書をご請求ください。

学校法人　本郷学園
〒170－0003 豊島区駒込4－11－1
電　話　　03－3917－1456
ファックス　　03－3917－0007　　担当 石田（事務長）

②申込書に所定事項をご記入の上、事務所へご提出ください。

③指定の銀行振込口座にご入金ください。

④入金確認後、「振込金受領書」並びに
「特定公益増進法人であることの証明書」（写し）を郵送いたします。

●税法上の寄付金控除

私立学校への寄付金は特定公益増進法人に対する寄付金として確定申告により所得税から控除されます。
なお、寄付金控除額は控除対象団体等への年間支払い寄付金の総額（年間総所得の40％以内）から2千円を差し引いた額になります。

「銀友」第43号

目　次

Index

p2 本郷学園同窓会会長ごあいさつ
南谷　修　高校8回生（1956年＝昭和31年卒業）

p3 学校法人 本郷学園理事長ごあいさつ
松平　頼武

p4 投稿
●本郷の思い出と私の近況
八嶋　政臣
高校4回生（1952年＝昭和27年卒業）
●ひたすら歩むジャズの道
リチャード・パインこと松本　易夫
高校6回生（1954年＝昭和29年卒業）
●屋久島だよりⅣ
福原　信夫
高校7回生（1955年＝昭和30年卒業）
●競泳のパフォーマンス分析
岩原　文彦
高校42回生（1990年＝平成2年卒業）
●戦争体験の聞き取り…大先輩を訪ねる
田口　雄飛
高校65回生（2013年＝平成25年卒業）

p24 同期の輪
「成人の集い」ほか

p31 トピックス
「本郷医師の会」第1回親睦会のご報告
杉下　和行
高校48回生（1996年＝平成8年卒業）

p32 2014年度事業計画・予算案

p34 2013年度事業・決算報告

p36 2013年度表彰記録

p37 2013年度定期総会報告
山際　幸雄
高校18回生（1966年＝昭和41年卒業）

p38 本郷学園同窓会役員（案）

p39 2013年度本郷祭報告
野口　貴洋
高校35回生（1983年＝昭和58年卒業

p40 「社会で活躍する卒業生」

p42 学園だより
●本郷高校2014年大学入試合格実績
●学園理事退任にあたって
中津川　直昭

p44 本郷学園同窓会会費納入者一覧

p49 訃報・編集後記

ごあいさつ

本郷学園同窓会
会長
南谷 修
高校8回生
1956年（昭和31年）卒業

3年前の3月11日。東日本大震災。心に大きな傷跡を残しましたが、やっと、三陸鉄道が北リアス線を含め全線が開通、復活し、宮城県、岩手県で瓦礫の片付けも先が見えるところまできました。

遅いながらも、復興への道を着実に進んでいるのでしょうか。

世界では平和の祭典、冬季オリンピックがソチで開催されるなかで、新たな厳しい対立が起き、緊張感が東ヨーロッパに広がり、アジアの緊張もさらに大きくなっております。

国内では経済の明るさが出てきた矢先の消費税のアップなど行先への不安感もあり、戸惑っているでしょうが、私達が常日頃から小さい選択、大きな選択を知らず知らずにしてきた結果でしょう。経済、政治、環境、科学等の諸問題も、その選択の積み重ねの結果にすぎないのではないでしょうか。

学園につきましては、90周年の記念として2号館が新築されました。地下2階には1,000人が収容できる大講堂を持っている学校としては画期的な（他にはない）ものであり、美しい校舎であります。卒業式・入学式がその講堂で挙行されました。

先を見通しての環境整備でありましょう。

さらに中学の入試を2月1日に移行いたしましたが、順調な滑り出しであると聞いております。

今年の大学入試結果も国立大学、早慶へと順調な状況であり、雑誌などで躍進する学校として話題になっております。早慶両校へ100名以上の合格者を出している2校（開成、本郷）として報道、紹介されました。

生徒の努力の賜物であり、先生方、学校の指導の結果であります。

私達の時代からすれば、なんとも誇らしいことであります。強健・厳正・勤勉の基と、文武両道・自学自習・生活習慣の確立、さらに紳士たれ、スマートたれと、今の社会に失はれつつあるものを大切な目標に学ばれているなかでの結果であります。理事長をはじめとする学校側と先生方のご指導が一緒になり、その努力で着実に水準を上げております。

大変、感謝するところであります。

同窓会は昨年度も、各分野で活躍された生徒への表彰として9件（文科系6件、運動系3件）58人を表彰いたしました。

恒例となりました「成人の集い」も高校63回生126人が集まり、久しぶりに再会、それぞれ異なった道を歩み出しているなかでの再会、大変、盛り上りました。

本郷祭では同窓会ブースで社会で活躍する卒業生として8人を紹介いたしました。関心度が高く強い絆となっております。

この様な状況ですが、同窓会の運営メンバーも高齢化しておりますことを多くの方々にご理解いただき、皆様のご協力を得たいと存じております。ぜひとも、ご連絡をいただきたいと存じます。

どうか皆様のお力で同窓会を盛り立てていただきたいと切にお願い申し上げます。

ごあいさつ

学校法人 本郷学園
理事長
松平 頼武

同窓会の皆様には、日頃、本学園はたいへんにお世話になっており、心から御礼を申し上げます。

本学園では、今年は大きな変革が2件ありました。

（1）1月末に2号館の建設が完了しました。

巣鴨門から入ると、グランドの正面の5階建ての美しい建物です。

かつてのデザイン科棟の跡地です。

地階に1,000人収容の講堂、2階がラーニングコモンズを併設した図書室、3～5階が教室となっています。屋上には、野球の投球練習場があります。

建物の大きな特徴は、H-パラレルアーチ構造で、2本のアーチが建物全体を支えており、柱のない大空間を作り出しています。

この建物は、本学園の創立90周年を期して計画したもので、本学園の創立100周年、そしてその先を見通しての教育環境の中心となるものであります。この建屋を大切に使い、大きな教育成果を上げるべく、有効に、有意義に活用して参りたいと考えております。

是非お近くにお出での節はお立ち寄り下さい。

（2）今年から、中学入試の初日を2月1日としました。

従来、2月2,3,5日であったものを、2月1、2,5日にすることにより、本郷を第1志望とする受験生を確実に受け入れることを考えたもので、良い結果が出たと考えています。

今年の大学入試の結果は、国立大学、早慶を初めとする私立大学への入試にたいへん良い結果が出ました。これは、受験生諸君の努力の現れですが、指導した教員の受験に対する真剣な取り組みと、指導力の向上による結果でもあります。

このように、本郷学園はとても良い方向に、明るい方向に向かって平成26年度を迎えることができました。

ただ、長年経営に携わっていただいた中津川常務理事が平成25年度末で退任されました。人事、入試への対応、新校舎建設など、本校の飛躍にたいへんご苦労いただきました。学園として心から感謝しています。

今後とも、同窓会の皆様には、本郷学園のためによろしくご指導をお願いいたします。

そして皆様方のご健勝、ご活躍をお祈りいたします。

投稿

本郷の思い出と私の近況

八嶋 政臣
高校4回生
1952年（昭和27年）卒業

昨年、同窓会総会に出席して、初めて懇親会に参加しました。そこで銀友の投稿を依頼されました。毎日が忙しくてお断りしたのですが、再度の依頼があり引き受けることになりました。

私は、本郷中学に入学したのは昭和21年4月です。一年遅れの入学となります。

私は、小学生の時2回疎開の経験があります。1回目は、第二次大戦の戦火も激しくなり、東京大空襲もだんだん現実的なものとなってきた昭和18年に家族で秋田県へ疎開しました。19年には一旦東京へ帰りましたが、東京最後の大空襲となった昭和20年5月24日の空襲で家も丸焼けとなり、2回目は岩手県に疎開しました。

2回目に疎開した学校では、終戦までまともな授業を受けた記憶がなく、学校が始まると山奥の炭焼き場まで行き、出来あがった木炭を駅の貨物列車まで一人に2俵ずつ割り当てられ、毎日背負って運ぶ仕事と、飛行機の燃料にするためにといわれ、松脂を山に行って採る仕事と農作業をするのがほとんどの毎日でした。

疎開先で昭和20年8月15日に終戦を迎えたわけですが、昭和20年9月には東京へ戻ってきました。

それからは、中学に入学するためにようやく勉強することが出来ました。

小学校も卒業出来なかった当時は、帰ってきた学校も焼けていたので、何処でも良いから焼け残った近くの小学校で卒業したという証明書を取り、翌年の昭和21年4月に本郷中学へ一年遅れての入学となったわけです。

本郷中学でも被災にあった校舎での勉強でしたが、幸い永井体育館は焼失をまぬがれ、当時としてはこのような設備のととのった体育館が少なかった時代でしたので、体操の選手が大勢来て練習していました。その中には本郷中学の先生だった竹本先生、上迫先生、池田先生、家崎先生をはじめ生徒も遅くまで

一緒に練習しておりました。

竹本先生はオリンピック・ローマ大会団体戦で総合優勝し金メダルを取ったメンバーで、体操日本の名を大いにとどろかせた方です。

竹本先生と上迫先生は、ヘルシンキ・オリンピックで個人種目別銀メダルを獲得されております。

上迫先生は、ローマ大会ではコーチとして参加されております。

竹本先生は、東京大会よりメキシコ、ミュンヘン、モントリオールと各オリンピックで監督として参加されております。

このような環境であったので、中学の時は私も当然体操部に入部し竹本先生、上迫先生に指導を受けました。

その後も、上迫先生には大学に入ってからもいろいろと指導を仰ぎ、先生の自宅を訪問しては麻雀などをもして楽しんだものです。

上迫先生（中列左端）、池田先生（中列中央）を囲んで
（昭和28年10月11日）

高校生になって陸上競技部の誘いにより陸上競技部に入部しましたが、現役時代を引退してからは、陸上競技の審判員をして現在に至っております。

高校時代には、近くに慶応大学陸上部の金森選手が住んでおられ、良くグランドに来られたのでコーチを受けながら一緒に練習したものです。

又、もう一人の先生で濱辺先生は学生時代早稲田大学で箱根駅伝を走られた方で、後に早稲田大学で箱根駅伝の監督をしております。

私が、神奈川大学で箱根駅伝2区を走ったときには、早稲田大学の監督車に乗っていた濱辺先生から声をかけられました。

現在、私は81歳を過ぎましたが、高校時代より60年間余り走り続けた足もさすがに年には勝てず、今ではジョギングに切り替え観音崎近辺を楽しく走っております。

昔は、人生50年といわれた時代もありましたが、今では男性の平均寿命も79・9歳となり、80～90歳でも当たり前の生活が出来る人も増えてきております。

社会人になって働き始めてから今日まで58年間が過ぎ、未だ現役で働く事を続けております。

職場を替えて最後の定年を迎えた時、これでやっとゆっくり自分の人生を過ごせると思った時は68歳になっていましたが、その時横須賀市役所より精神障害者の相談員を依頼され、引き受けることになり74歳まで非常勤職員として勤めました。

現在は、NPO法人を立ち上げて福祉の事業を始めて現在に至っております。仕事は、障害者の生活の場としてケアホームを開設し、更に障害者の日中の生活の場を開設して、現在は、もう一つのケアホームと計3箇所を運営し障害者への支援を行っております。

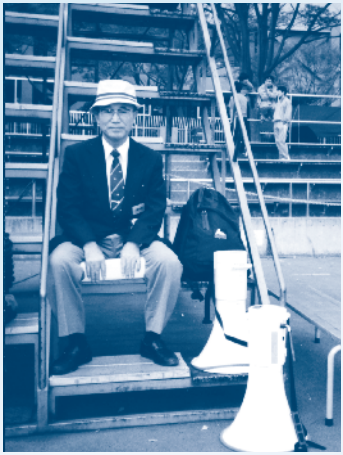
日本の人口も高齢者人口となり、国民4人に1人が65歳以上の高齢者となって、3,000万人を超える時代を迎えておりますが、体力においても70歳以上の方の体力は最高となっております。

わが人生も本郷高校に入学と同時に走る事に徹し、現在も走る事を基本に健康管理をしておりますので、病気らしい病気一つせずに未だに仕事が続けられております。

投稿を引き受けてから久しぶりにアルバムを開いてみましたが、当時の校舎や先生方、学友などの写真を見て、現在の立派な校舎などと見比べ、懐かしく思いました。

高校を卒業してから60年以上過ぎましたが、現在はほとんど校友との意思疎通ができておりません。皆さんもまだ元気でおられると思いますので、これを機会に意思の疎通が出来ればと願っております。

現住所：神奈川県横須賀市鴨居1-49-21
電話番号：046-842-3171
会社電話：046-826-2313



現在も審判員として陸上競技に携わる

投稿

ひたすら歩むジャズの道

リチャード・パインこと
松本 易夫
高校6回生
1954年（昭和29年）卒業

二年前に喜寿を祝い来年には傘寿を迎える。おかげさまで今も、現役のジャズ・ミュージシャンとしてリチャード・パインのステージネームでアルトサックスを携え、マネージャー（といっても妻だが）を置いて、元気に演奏活動を続けている。演奏の舞台はライブハウスやホテルのラウンジなどが中心だが、時にはFM放送などにも顔を出す。妻との二人三脚もこれまでと変わらない。下世話に〝道楽稼業〟といわれるとおり、浮き沈みは激しい。苦労ばかりかけている妻にはいつも感謝するばかりだ。

ジャズは〝こころ〟、〝ソウル〟の音楽である。奴隷として売られてきたアフリカ系アメリカ人の過酷な生活環境の中で生まれたジャズは、一面からいえば苦しみを訴える、いわば〝恨み節〟であろう。だが反面、その厳しい環境をはね返して生き抜こうとする人間本来の〝たくましさ〟がくみ取れる〝たましい〟の音楽ともいえる。そこには自由をうたい上げる〝明るさ〟が感じられる。黒人たちの苦難の体験からブルースが生まれ、ゴスペルが生まれ、そしてジャズが生まれるのである。希望を失わない精神性の高いジャズだからこそ、あっという間に白人社会に受け入れられ、全世界で演奏されるようになった。

人々の心の奥底にある、〝言葉〟では表現し尽せない喜怒哀楽の微妙な感情までも、音を通して訴えるジャズは、ポピュラー・ミュージックの雄である。ハートに迫るそのリズム、ビートはいつの時代も、人の心を揺さぶる。ジャズ演奏は楽器を介しての言葉を超えた心の対話ではないだろうか。グローバル化の時代といっても国境という線は引かれており、言葉にも国境がある。ところがジャズには国境はない。日常生活のさまざまな障害や垣根を越えて、すなおに生きる喜び、感動を共有していける世界である。

明治大学在学中にジャズ界にデビュー。その後、石橋エータローさんのバンドに参加して

プロフェッショナルの道に進む。横浜が演奏の舞台だった。1962年にバンド「松本易夫クインテット」を結成し、約5年間、ナイトクラブ等で演奏活動を続け、その後の2年間ほどは、他のコンボにゲスト出演して感性を磨き上げてきた。

そして1969年、それまで自分たちで演奏していた腕ききのメンバー4人を集めてジャズ、ポップ、リズム&ブルース、ヒュージョン、ロックと幅広い楽しさをプラスした「ザ・リチャード・パイン&カンパニー」を立ち上げた。その年には、TBSテレビ（テレビジョッキー・サタデイヤングナイト）にレギュラー出演したし、文化放送（オーフリー）、TBSテレビ（ヤング720）に出演したほか、東京、大阪の一流ホテルのラウンジ、ナイトクラブ等でも演奏を続けてきた。

1973～74年にかけてはグァム島のサンドプラザ・ジョイナスに出演していた。帰国後は都内のライブハウス、ホテルなどで演奏を続けるかたわらテレビの音楽番組のパーソナリティーも務めた。タイのバンコクで国王の誕生日を祝う催しで演奏したのも楽しかった思い出のひとつだ。

ジャズの〝いのち〟であるアドリブ演奏、つまり即興演奏を堪能できるのはライブのステージだ。打てば響く。聴いているファンの表情がみるみる変わっていくのがわかるライブのステージが大好きだ。会場に足を運んでくれるファンも当意即妙ともいえる、変幻自在ともいえるアドリブ演奏を期待している。一緒になって盛り上がっていくのが何ともいえない。曲の楽譜にとらわれず、メロディー、コード、モードなどにそって即興的に演奏する。もちろん基本をしっかりマスターしているからこそできるテクニックだが、アドリブプレイヤーを自認する私としては、少々自由なのが面白い。そして思いっきり楽しんでこそ名演奏は生まれると思う。すべてのジャズ演奏家が心血を注いで追い求めているのが、このアドリブ演奏である。

そうした演奏を何枚ものアルバムにして収めてきた。ここで、そのひとつを紹介させていただこう。『サンフラワー』のタイトルでスタンダードジャズ、ラテンミュージック、スクリーンミュージック、クラッシク小品集そして私のオリジナル

曲と、ライブステージでリクエストの多かった曲目を選んで収録した。どれも、どこかで聞いたことがあるな、と思える曲をそろえている。

ちなみにそのラインナップは①サンフラワー②ダニー・ボーイ③Richapan（Red Top）④ノクターン⑤コルコヴァード⑥オン・ザ・サニー・サイド・オブ・ザ・ストリート⑦レヴァリー⑧メイヤ・ディスティニー⑨オーヴァー・ザ・レインボウ⑩ティン・ティン・デオ⑪フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン⑫クライ・ミー・ア・リヴァー⑬サテンドール⑭キャラヴァン⑮ヨーロッパ（ボーナス・トラック）。④ノクターンはショパン、⑦レヴァリーがドビュッシーの作品。⑧は私のオリジナル曲で⑥と⑪が私の歌である。ピアノ出口誠、ベース山口雄三、ドラムス山下暢彦と、信頼する一流のメンバーが顔をそろえている。

ただただ、好き好きでたまらず、ジャズの何たるかもわからず向う見ずにも、この世界に飛び込み、わき目も振らずに突き進んできた。半世紀をはるかに超えるステージ生活では、アルトサックスのほかバリトンもテナーもソプラノも吹いてきた。パーカッションもコンガもドラムもやった。ヴォーカリストとして歌も歌ってきた。折々に脳裏にポッと浮かぶメロディーを書きとめておいて作り上げたオリジナル曲は数えきれない。

藤沢のライブハウスにて（2007年7月7日）

振り返れば気の遠くなるような長い年月だが、その日々はジャズの〝演奏の原点〟と向き合う修練の連続であった。ジャズが寄り添うように呼びかける〝生きることの尊厳〟を〝日本人の表現力〟を超えて演奏したい、という努力目標があるからだ。それは今も変わらないし、これからも変わらない。

ジャズ人生のきっかけは家庭環境にあった。モダンで洋楽フアンだった父が持っていたレコードを聴きながら育った。もの心がつくころには楽器で演奏してみたくなり、本郷高校に入ったころにはトランペットやサックスを吹き、ドラムを叩いていた。今でこそいろいろな教室があって、勉強するところはいくらでもあるが、当時はそんな環境はまったくなかった。ひたすらレコードを聴き、米軍放送を聴いて、どうしたら音が出るか、数少ない教則本を頼りに、時には演奏経験のある人にアドヴァイスを受けながら、自己流でレッスンしていた。いわゆる独学である。専門家に教えてもらおうとしても「自分で勉強しろよ」と、そっけなく断られる時代であった。ところがトランペットは音が飛び過ぎるし、ドラムはうるさい。当然、隣近所から苦情がくる。そこで高校生活の後半ごろから音が小さいサックスに絞って練習するようになった。

明けても暮れてもジャズ三昧。両親には「なにをやっているの。ジャズでは食ていけないよ」と叱られる始末だ。少しは安心してもらおうと、とりあえず明治大学に進学した。しかしジャズ漬けの生活は変わらない。むしろ、さらにのめり込んでいった。仲間とバンドを組んで各地の米軍基地や施設のクラブで毎日のように演奏していた。大学の授業は欠席の連続で試験も受けない。2年生までは進んだものの大学はあきらめて中退し、プロの道を選ぶことになる。

米軍キャンプなどでの連日の演奏でスタンダードジャズをたくさん覚えた。これが貴重なジャズ修行の場となっていた。さらに幼稚園児のころから聴いていたレコードもすべてスタンダードナンバーで、ジャズのエッセンスを体に染みこなせてきた。それだけに自信はあった。あこがれのプロの世界に不安を突き抜けて青春の血はたぎっていた。

投稿

屋久島だよりⅣ

福原 信夫
高校7回生
1955年（昭和30年）卒業

ボロボロの古い過去帳の書き換えを、東京駒形の菩提寺に頼んだら、古い過去が又現われた。文久、安政、天保と江戸の匂いが線香の香りの中に現われた。私が生まれたのは昭和十一年、二・二六事件の年。今年七十八歳。生年から七十八年遡ると明治維新の十年前。新選組、赤報隊、上野彰義隊。大砲の音、黒門の崩れ。私はそんな上野は御徒町に生まれた。今ではその地名は駅名だけに残り、ただ上野。幼い頃の遊び場は西郷さんの銅像の下。そして今住んでいるのがその西郷さんの鹿児島。何の縁か。見えざる過去の結ぶ縁か。屋久島に来た当初、多くの人に聞かれた。どうして屋久島なのですか。その時いつも上野の西郷さんの縁なのですよ、と答えていた。

知人も親類もいない、この遠い島によく来たものだと今でも思う。ただ当時、年賀状などに屋久島移住を告げると、ほんの数人ではあったが「羨しい」と云ってくれた。内心ヤッターと思ったものだ。

屋久島は平成五年十二月にユネスコの世界自然遺産に日本で初めて登録された。私は翌年の六月に土地を購入していた。町では世界遺産に登録されたため観光客が急増し、宿不足に頭をかかえていた時だった。平成七年には神戸大地震とオーム事件を連日TVで放送していた。そんなTVを見ながら、ひとりで木造建築のことを学びながらユースホステルの建築設計図を書いていた。そして島に渡り二年がかりで整地し、地元の倉野萬作翁に建築を依頼、平成八年十二月完成し、「屋久島ユースホステル」をオープンした。

時、場所、人（妻も協会もすぐ許諾してくれた）が運よく合致し、宿は大繁盛した。すぐ周囲の土地も一年がかりで購入。一町歩（約三千坪）の土地と新館の建設。六十歳で始めた仕事がうまい具合に廻ってくれた。

やがてブームも去り、夫婦は年をとる。息子は後を継がない。仲間には夜逃げした者があるが、さいわい二億円の借金の返済は完了した。何とか生き永らえると思ったのも束の間。世

の中それ程甘くない。三年ごしで後継者と頼んだ夫婦に逃げられ、その時私は手術台の上。万事休す。絶体絶命。でも妻の協力で何とか切り抜けた。それから早や一年。何とか生き延びている。奇跡の生還？ウソ。まぐれ。男の平均寿命は七十九歳という。それ迄あと一年。それ迄生きられればいいと達観した。上にはたくさんウソをついて成功している人がいる。下にはウソをつけないで苦悶している正直者がたくさんいる。そんな事を見て来て屋久島生活十八年。

今これを書いている冬の冷たい雨の音を聞き乍ら逝ってしまった友の顔が蘇ってくる。四輪駆動で朝まだき、遠い島の反対側永田の浜からわが宿の客のため早朝暗いうちに迎えに来てくれた、島のガイド日高徹おじ。島のわれらに文化の香りを届け続けてくれた雑誌「生命の島」の日吉眞夫編集長。その日吉さんと共に四十年以上も前にこの島にやって来て屋久島を発信し、島で哲学することを貫徹して逝った詩人の山尾三省さん。

島の言葉を早く覚えろよ、と毎晩やって来ては焼酎三缶を飲み交した地主の岩川典義さん。良い板前が欲しいがと頼めば、弟を使えよと云ってくれた旅荘屋久島のおやじ岩川和義さん。地元平内のハゲチャビン三人組で仲間を作り、地元とアイターン来島者との梯(かけはし)を作ろうと励ましてくれた消防団長の森林三さん。町営の国民宿舎の建て替え跡に無茶な外資のホテルが建つぞ、一緒に立ち上がって反対の声をあげねばと誘ってくれた屋久島一二のホテルのオーナー菊永正武さん。さあこれからは屋久島も国際化時代だ、共に手を携えて走り出そうとした矢先癌に倒れた山口道夫さん。（お兄さんはわれらユースの仲間会津喜多方の有名人の山口和生さん。この方も弟の死を弔いに島にやって来た直後亡くなってしまった。）

早々とインターネットの時代を先取りせよと教えてくれた七つの海の航海男の隣組中山枢さん。島の名物たんかんを一つ一つ吟味して毎年供給してくれた松原小百合のおばあ。商工会や観光協会で理事になった頃、何も知らぬ私に島のルールを丁寧に教えてくれた屋久杉工芸の脇田正一さん。そしてわが家の愛犬の私と一緒に島入りした牝のメリーと島育ちの伝説の番犬甲斐犬牡タケマルはもうとうに土になってしまった。

この島でこうして無事に仕事

をしてこられたのも、逝ってしまったこれら大勢の友や、今でも機会のある毎に飲み会に誘ってくれる大勢の飲み友達のお蔭である。

観光庁のかけ声でインバウンドの客がどんどん増えている。わがユースもその為、日によっては外国人の方が多い事がある。マリア、キャシー、ジョージなどと広間は国際的。遠くの珍しい国の人も来るようになった。このままカタコト英語で老夫妻がいつ迄宿を続けられるかは分からないが、只今後継者ゼロ。興味のある方はいつでも来て下さい。本当に屋久島はいいですよ。屋久島ユースもいいですよ。

最後に私がユースを創業するに際し、そのキッカケを作ってくれた、サミュエル・ウルマンの「青春とは」（YOUTH）をお目にかけよう。今でもこの詩を広間に掲げてある。昔は旧訳であったが、今は新井満の自由訳（講談社）。

「青春とは、真の青春とは、若き肉体のなかにあるのではなく、若き精神のなかにある

薔薇色の頬、真赤な唇、しなやかな身体、そういうものはたいした問題ではない。問題にすべきはつよい意志、ゆたかな想像力、もえあがる情熱、そういうものが、あるか、ないか、

こんこんと涌きでる泉のように、あなたの精神は今日も新鮮だろうか、

臆病な精神のなかに青春はない、大いなる愛のために発揮される勇気と冒険心のなかにこそ青春はある。

臆病な二十歳がいる、既にして老人、勇気ある六十歳がいる、青春のまっただなか。

歳をかさねただけで、人は老いない、夢を去ったとき、はじめて老いる、（中略）

あなたの心のアンテナが今日も青空高くそびえ立ち、いのちのメッセージを受信しつづけるかぎり、たとえ八十歳であったとしてもあなたはつねに、青春

青春とは、真の青春とは、若き肉体のなかにあるのではなく、若き精神のなかにこそある」

では屋久島からさようなら。

屋久島ユースホステル本館

投稿

競泳のパフォーマンス分析

岩原 文彦
高校42回生
1990年（平成2年）卒業

2013年9月7日、2020年夏季オリンピックを決める国際オリンピック委員会（IOC）の総会がブエノスアイレスで行われ、2度の投票を経て、開催都市が東京に決定した。これにより、1964年東京オリンピック以来、実に56年ぶりに東京に夏季オリンピックがやってくることになった。

この東京オリンピックの決定には、開催都市のオリンピック誘致への支持率も重要な要因であった。2012年5月の時点で47%と低調であった東京の支持率も、2012年のロンドンオリンピックで史上最多の38個のメダル獲得という機運に乗じて、オリンピックへの関心が高まり、2013年1月に行われた調査では73%にまで達し、IOC委員にも好印象を与えたことであろう。この支持率の高まりに好影響を与えることなったロンドンオリンピックによるメダルラッシュは、選手・コーチ達の弛まぬ努力があったことは言うまでもないが、アスリートを取り巻く環境の変化も挙げることができる。

この環境変化の一つとして、国際競技力の向上のために必要な人的支援や練習機材等の研究開発に対し、国が政策として支援するプロジェクトの存在がある。私は、1990年後半より競泳をメインに科学的サポート活動を行ってきている。当初は、大学院生であったことなどからボランティアで行っていたこの活動も、現在は前出の政策として行われているチーム「ニッポン」マルチサポート事業に所属し、日々、国際競技力の向上の為のサポート活動に尽力している。

このチーム「ニッポン」マルチサポート事業とは、オリンピック競技大会においてメダル獲得を目指し、我が国の国際競技力向上に貢献する為に多方面からの高度な支援を行う事業で、メダルを狙える位置にある種目を対象に行われている。この対象種目は、体操競技や競泳、柔道を始め、フェンシングや卓球、バトミントンなどがあり、私は競泳のパフォーマンス分析を担当している。競泳のパフォーマンス分析の主な仕事にレース分析がある。本稿は、この活動について報告したい。

写真・1は、国際大会の会場にてレース分析のためにレース

を撮影したときの映像のひとコマである。レース分析に用いる映像は、スタートの合図からゴールするまでの間、選手を追いかけて撮影する。この映像は、単純に対象選手をアップに撮れば良いという訳ではなく、選手の全身と分析に必要な目印となるコースロープの模様を常に写しこんでおかなくてはならない。このコースロープは、壁から5m、15m地点、25m地点、35m地点および45mから50mまでの地点および区間で色が変わっており、この模様の切れ目を物差しとして用い、各区間の通過タイム、泳スピード、ストロークの長さやストロークの頻度等を計測する。また、同じレースに複数の対象選手が出場する場合、全ての選手を撮影しなければならず、一人の選手の泳法を集中して観てしまったりすると他の選手たちがフレームアウトしてしまったり、分析に必要な情報が映っていなかったりしてしまう。そのためには、カメラの画面の中心に対象選手がおさまるようにし、画面全体をぼんやりと眺めながらできるだけ冷静に撮影しなければならない。よって、たとえ日本選手が世界新記録を樹立するといった歴史的な瞬間に、そのレースの映像を撮影していたとしても、そのレースの内容を把握していないなんてこともある。また、この撮影は観客席の最上段で撮影することが殆どであり、白熱したレース展開や地元選手の活躍などにより熱狂した観客が総立ちになってしまう時など、この観客の合間を縫ってレースを撮影しなければならない。さらには、世界的にテロに対する警戒が強まっている時などは、大会組織委員会と会場警備とのコミュニケーションの不備により、大会組織委員会から指定された撮影場所が進入禁止場所になってしまっていたりすると、警備員との交渉が大変である。銃を持った警備員から移動するように求められても、居座り続け、レース映像の撮影を続ける場合もある。このような状況下での撮影では、高度な撮影テクニックや知識を持っていても、何の役にも立たない。このように苦労して得た映像は、レース終了後2時間以内には分析がなされてコーチのもとにフィードバックされ、ねらい通りのレー

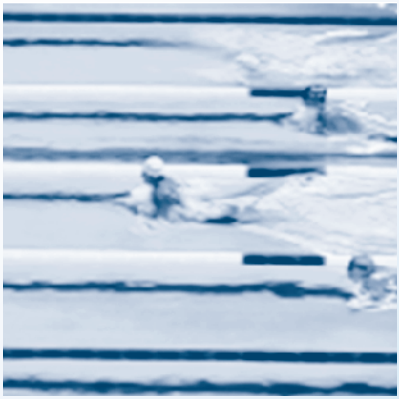


写真-1　レース画像

ス展開ができたか、目標タイムを達成するのに何が足りないのかを検討するのに有効活用されるのである。

たとえば、本郷高校水泳部に所属していた頃の北島康介選手は、前半から飛び出していく「先行逃げ切り型」の選手で終盤の失速が課題だった。当時の彼のレースを分析すると、前半の50mはストロークの長さも頻度も適切なものであったが、最後の25mでは、ストロークの長さが短くなっており、ストロークの頻度（ピッチ）も非常に高くなっていた。

平泳ぎの特徴として、キックをするために足を引き付ける時に大きなブレーキが生じる。平泳ぎは、単にストローク頻度を上げればスピードが上がるわけではなく、適切なストローク頻度が存在する。要は、自転車でペダルを踏み込んで加速した後に、すぐ、ブレーキをかけてしまっている状態である。ペダルを踏み込んだ後、少し惰性で進む時間を持ったほうが効率がよくなる。彼のレース展開では、前半から飛び出して疲れが溜まってきた頃に、さらに効率の悪い泳ぎになってしまっていた。この点について、レース分析のデータを用い、レース終盤の苦しくなってきた頃に、焦らず大きな泳ぎをすることを提案した。

また、**写真・2**の撮影風景で映っているレース分析で使用している撮影機材は、一般に市販されているデジタルビデオカメラである。今日、子どもの運動会や学芸会に行くと、我々の使用しているカメラよりも高性能なカメラを構えた父兄を多く見る。世界トップクラスの選手達をサポートする機材ではあるが、最先端のテクノロジーが詰まった高価な機材ではなく、手軽に持ち運べ、撮影したその場で分析までできるハンディータイプのカメラを使用している。

写真 - 2　撮影風景

このように、世界トップレベルの選手達をサポートする為に必要な環境は、必ずしも最先端のテクノロジーだけではなく、競技現場のニーズを察知して柔軟に対応できる人間と道具、そして、目標達成に向け臨機応変に動ける機敏さとふてぶてしさであったりもする。

投稿

戦争体験の聞き取り

・・・大先輩を訪ねる

田口 雄飛
高校65回生
2013年（平成25年）卒業

1．ごあいさつ

平成25年卒高校65回生の田口雄飛です。本郷学園在学中は生徒会副会長をさせていただいておりました。他の皆様と比べ圧倒的に経験（人生経験そのものも）が少ない上に筆も拙く、このような場にて数多くの先輩方のお目に触れますこと誠に畏れ多く緊張恐縮致しておりますが、一所懸命頑張りますのでどうかお読みいただけましたら甚だ嬉しい限りです。

2．本文

数年前から戦争体験の聞き取り活動と資料収集をしている。活動と言っても個人で自由にやっているだけであるが、自分なりにはかなり根をつめて真剣に取り組んでいるつもりだ。

大学では慶應義塾福澤研究センターで昨年（2013）夏から始まった「慶應義塾と戦争アーカイブプロジェクト」にプロジェクトメンバーとして参加している。これは昨年の学徒出陣70周年に合わせて開始されたプロジェクトである。主に慶應義塾関係者だけを対象とした調査で戦前戦中期の慶應義塾の様子を記録として残そうとするものであるが、慶應義塾と戦争について見つめることで、ひいては当時の日本が戦争とどのように向き合ったかを問い直す重要な試みだという。昨年夏のNHKを初めに新聞各社やニュース番組などにも度々取り上げられ、各方面からそれなりに注目を集めている。

私個人としては、プロジェクトの関係で知り合った新聞記者の方に個人的に取材を受け、記事にしていただいたりもした。その時は「いま子どもたちは―戦争を学んで」という枠の執筆をすることになっているので取材させてくれないか、というような話ではなかったかと思う。長時間にわたり丁寧に取材をしてくださり、記事に仕上げてくださった。

朝日新聞2013年10月26日（土）付朝刊34頁に掲載されたものがそれだが、これは先に紹介した慶應義塾のプロジェクトとは直接の関係がなく書かれたものなので私自身の興味関心が

適切に表現されている。私自身の聞き取り活動としては当時を知る一人でも多くの方のお話を伺いたいと考えている。聞き取りと並行して行っている資料収集にしてもそれと同じだ。

しかし今でこそこのようなことを述べてはいるものの、小学生時代の私は日本と戦争のことなど全くと言っていいほどに何も知らなかった。ある時中学受験塾での先生の雑談の中に登場した戦艦大和という単語に関心を持ち、翌日学校の友人に戦艦大和は誰にどうして沈められたのかなどと聞いた記憶がある。よく憶えてはいないが「イスカンダル」や「ガミラス帝国」などの語を用い詳しく教えてくれた。何のことはない、彼は「宇宙戦艦ヤマト」のことを言っていたのである。が、私はその友人の回答に特に疑問も抱かず納得していた。関心はあったものの、その程度の認識しかなかったということであろう。今にして思うと不思議なほどの無知さだが、知らなかったものは仕方がないと言うほかない。

そんな私が戦前戦中の時代に関心を持ったのは、中学一年の夏に駅前の書店で偶然目にした新潮文庫の『指揮官たちの特攻-幸福は花びらのごとく-』（城山三郎著）を読んだ事がきっかけだった。それまで過去に日本が実際に行っていた戦争のことなど特に考えたこともなかった私はそれを読んで大変な衝撃を受けた。そこに描かれた人々は、戦前戦中の日本人についてそれまで私が抱いていたイメージとは全く異なっていたのだ。それまで私は彼らについて、歴史の中の一部としての漠然とした認識しか持っていなかったのかも知れない。おそらく他の多くの人々もそうだろうと思う。しかし彼らは単なる歴史の一部などでは決してなく、彼らの一人ひとりが必死に生き、些細なことにも笑い、泣き、苦しみ、葛藤する心を持ったありふれた人間だったのだということを改めて思い知った。どうしても彼らが人間的に今の自分たちと決定的な違いがあるようには思われなかった。戦前戦中にどのような人がいてどのようなことが実際にあったのか、本当のことが知りたくなった。

それ以来、戦争について書かれた本を特に体験者の手記を中心にひたすら読み漁った。そして様々なことを知れば知るほどに、脚色や恣意のないありのままの事実が知りたくなった。

高校2年生になった頃から本

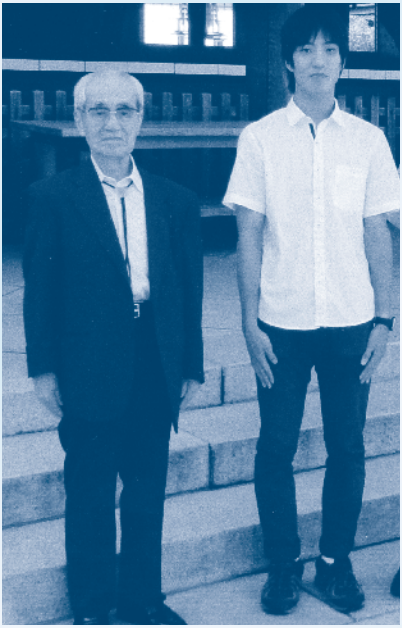
格的に資料の収集を始め、戦時期の写真や戦後の戦友会誌なども集めるようになった。それと同じ頃からだろうか、実際に戦争を体験された方のお話を直接聞きたいと思うようにもなった。

しかし戦争体験者の話を直接聞いてみたいと思いはしたものの、話してくれる方を探すのがこれまた大変だった。下手をすれば相手を深く傷付けることにもなりかねない、興味本位や浅はかな気持ちでやってゆけることではないのだ。気に入っていた本の作者に手紙を書いても返事はないし、名簿を見つけ出して電話をかけてみたら本人の代わりに出た誰だかわからない人に話も聞いてもらえず怒鳴り散らされる始末。正直、訳が分からなかった。

そんな状況でどうしていいかわからず困っていたところ、助けてくれたのは本郷学園同窓会だった。それまでの事情経緯をお伝えし昔の本郷学園のことや戦争体験をお持ちの先輩方のお話をお聞きしたい旨をお話したところ快くご協力を約してくださり、その後本当に中学13回（1940年）卒業生の景山正隆さんを紹介してくださった。

景山さんは旧制私立本郷中学から府立高等学校文科乙類を経て東京帝国大学文学部国文学科在学中に「学徒出陣」により海軍に入隊し戦後卒業された秀才で、戦後は県立兵庫高等学校教諭や東洋大学文学部国文学科教授等を長く勤めた文学博士である。歌舞伎や伝統芸能に関わる要職を歴任し、現在も第一線で活躍する歌舞伎音楽研究の権威でいらっしゃる。

「僕と君の年齢だと72年違うから、年代的には君が僕の話を聞くのは丁度本郷中学5年生になる時の僕が明治維新の時の人から話を聞くのと同じになるんだね。」。お会いしてみると90歳近い年齢を感じさせないシャ



中学13回卒の景山正隆さんと。

キッとした背筋に優しさをにじませつつもはっきりとした声、この方が本当に大正生まれだなどと俄かには信じ難いほどだった。景山さんには度々お会いし様々なお話を伺った。

旧制本郷中学在学中のこと。（現在でもそうだが）当時もテスト期間中は下校時間が早かったということで、本中時代の景山さんはその日急いで帰ると昼飯を済ませて歌舞伎座に行き、歌舞伎一幕を立ち見席で観るのを楽しみにしていたという。歌舞伎を観ると爽やかな気分になり、翌日の試験の勉強にも集中して臨むことが出来たということだ。歌舞伎・人形浄瑠璃などの近世芸能が好きで堪らなかったその景山少年が時を経て、今では歌舞伎音楽研究の第一人者とまでいわれる存在である。そのことを思う時、好きなものに素直であることや夢を追いかけ続けることの大切さのようなものを私は感じさせられる。

また、昭和16年12月6日、当時府立高等学校の生徒だった景山さんが学校の部活動の帰りに友人たちと支那ソバ屋で談笑していた時のことである。日本の社会情勢に関することが話題となり、「アメリカなんかと戦争をして勝てるはずがない！」と言ったのをはっきりと記憶されている。翌々日の12月8日、景山さんは日本が米英と戦争状態に入ったことをラジオの臨時ニュースで聞いて驚いた。そしてそれから僅か二年後の昭和18年12月10日、景山さんは「学徒出陣」により海軍に入隊することとなる・・・。

昭和19年12月25日海軍少尉に任官された景山さんは「第25魚雷艇隊付を命ず」（在ダバオ）という辞令を受けたが、フィリピン行きが中止となり待機中に「特攻隊付を命ず」の辞令を受け長崎県川棚の臨時魚雷艇訓練所にて特攻艇・震洋の艇隊長として予科練出身の搭乗員の訓練にあたることとなった。その後訓練中に高熱で倒れ自宅療養を命じられ、終戦は疎開先島根県の山村にて療養中に迎えられた。

景山さんのお話はどれも非常に貴重なもので、私は夢中で聞き入り、当時の人々の生活に思いを馳せた。

次にお会いした本郷学園の大先輩は、中学15回生の中村美登さんだった。中村さんは本郷中学卒業後、昭和18年4月、第12期甲種飛行予科練習生として海軍に入隊。大戦中は96式陸上攻

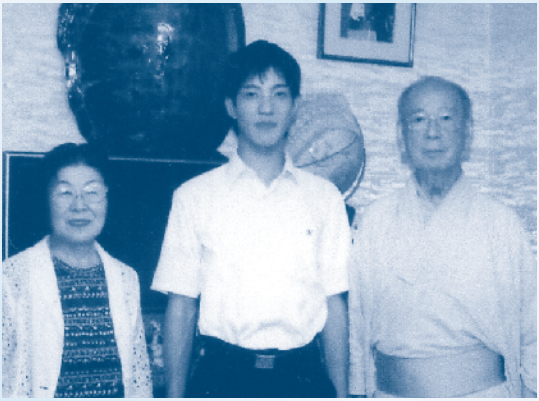
撃機操縦員としてジャワやフィリピンなど前線の大空を翔けた。ペナン島での現地人との交流の話も大変興味深い。

戦後は電電公社に就職し、自他ともに認める「仕事の鬼」として活躍された。非常に社交的で温かみのある紳士で、海外の方との交流がお好きで現在でも国際交流を精力的に続けておられる。

景山さんや中村さんのような多くの立派な方々との出会いが、私に本郷学園の大先輩方の存在を大きく意識させ、もっともっと多くのことを知りたいと願わせた。それからというもの、私はそれまで以上に熱心に調査に取り組んだ。

調べているうちに次第に様々なことがわかってきた。このような方々のことだ。

海軍第3期甲種飛行予科練習生出身で、零戦搭乗員としてラバウルの四空（第四海軍航空隊）に所属し、昭和17年7月10日のポートモレスビー攻撃行に陸上攻撃機隊の制空隊として参加、敵機との空戦により戦死された方もいる。この方は中学12回生。



中学15回卒の中村美登さん。ご自宅の応接室にて奥様の喜多子さんも共に。2012年9月と2013年9月、二度にわたりご自宅まで伺いお話を聞かせていただいた。優しく社交的、いつもどこでも立派に和服を着こなすダンディな紳士。

『八機の機関科パイロット』（碇義郎著光人社）という書物の中で取り上げられている竹井改一さんという方は、本郷の中学10回生。海軍機関学校出身でありながら飛行科に転科された方で、一式陸上攻撃機の操縦員として戦死された。昭和19年10月15日、第26航空戦隊司令官有馬正文少将の指揮の下に出撃し敵艦に突入したといわれる機の操縦員であった方だと言えばご存知の方もいらっしゃるかも知れない。

また、昭和20年4月16日、米機動部隊攻撃に鹿屋基地を出撃し特攻戦死された海軍第13期飛行専修予備学生出身（「学徒出陣」ではなく志願）の有村泰岳さんという方は景山さんと同じ本郷中学13回生。神風特攻「第

4昭和隊」の一員として、爆装した零戦を駆っての片道攻撃であった。

同じく中学13回生の黒鳥四朗さんは東京高等農林学校（現・東京農工大学）卒業後、第13期飛行専修予備学生として昭和18年9月海軍に入隊。その後昭和20年5月25日、B29邀撃戦闘において夜間戦闘機「月光」偵察員として活躍し、横須賀鎮守府司令長官により全軍布告のうえ軍刀授与された方だ。この詳細は『回想の横空夜戦隊』（黒鳥四朗著・渡辺洋二編、光人社）の中に詳しいが、これは奇しくも黒鳥氏が亡くなられる数日前に出版されたものだ。ぜひ直接お会いしたかった方であり非常に残念である。

これらはどれもみな我々の大先輩方の確かな足跡だ。彼らは歴史の中で確かに生きていた。

確かに当時の彼らの考え方は現在の我々のそれとは異なっているかも知れない。しかし歴史を考える際には必ずその当時の社会のことを念頭に置かなければならないというのと同じように、戦争の時代を生きた人々のことも現在の感覚だけで理解しようとしてはいけないだろう。そうした時、確実なのは、当時の彼らは彼らなりに日本の将来の繁栄を願い愛する者や子孫のことを真剣に考えていたということではないだろうかと思う。

戦争末期、「いいか、生き残れ！お前たちの時代は必ず来る！」と若い水兵に言い残し自らは特別攻撃隊員として出撃し戦死した上官について実際にその言葉を受けた元水兵本人からお話を伺ったことがある。その上官の言葉の真意は今となっては誰にもわからないが、何か深い思いが込められていたのだろうか。

本郷学園出身の先輩方のことについて一から調べ始め、詳しいことがわかっているのは現在まだ十数名に過ぎないが、それでも大きな成果だと思う。戦中戦後の混乱を思えば頷けることだが、何せ彼らの卒業後の足取りがわかる体系的な資料が存在しないのである。

本郷学園は今年で創立92周年を迎える。深く考えずそうかと言うだけで流してしまう人も多いだろう。けれど92周年というのは単なる数字ではなく、そこにはそれだけ長い歴史が刻まれそれだけ数多くの先輩方がこの本郷学園から巣立っていかれたという事実が込められているのだ。しかし主たる記録のない

今のままでは、先輩方の歩んできた本当の歴史は忘れ去られ、イメージだけを語り継ぐことになってしまう。

そうならないためにも、本郷学園の持つ歴史の重みを踏まえ、私はいつの日か本郷学園の黎明期から現在に至るまで数多の先輩方の歩まれた歴史をまとめてみたい。そのためにも一人でも多くの方からお話を伺いより多くのことを知りたい。そしてありのままの事実を後世に語り継ぎたい。確かに本郷学園が旧制中学だった戦前戦中の時代の評価については様々な立場も存在するし難しい問題を抱えてはいる。しかし先ずは何よりも、恣意や脚色、イデオロギー性のないありのままの本当の事実を語り継いでいくことこそが必要だと思う。本郷学園の長い歴史の中でどのような方たちがどのような生活を送ってきたのか、私はその先輩方のことを知りたいし、忘れ去られた歴史の片隅に追いやってしまいたくはない。

3．終わりに

お読みくださった方のほとんどが大先輩・先輩諸氏でいらっしゃることと思います、このような長く拙い文章にも関わらずここまでお読みくださいまして本当にありがとうございました。

また、本郷学園や戦争に関する資料をお持ちの方、戦争体験をお持ちの方をご存知でいらっしゃる方がおられましたら、もし宜しければ、ぜひ同窓会を通してでも私の方までご一報いただけますと本当に嬉しいです。宜しくお願いのほどを申し上げます。

なお、私がこのような活動を始めることが出来たのも、ここまで続けてこられたのも、すべてひとえに本郷学園同窓会のご協力があったからです。また、貴重なお話を聞かせてくださった大先輩諸氏にも心より感謝致しております。これらすべての方にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。本当に、ありがとうございました。

同期の輪

高校63回生（2011年=平成23年卒業）
成人の集い
時間を越えた銀ボタン

關田 宗範

新緑がまぶしい5月某日、巣鴨の駅のホームに降り立った私は階段を一段一段上がりながら背筋を伸ばしていた。在学の頃からの癖だと思う。かつては巣鴨駅に降りれば十文字学園の女子校生連の目を意識していたのだと思い返されるが、卒業後の今日は一歩一歩を踏みしめながら想い出の花を咲かせていた。

毎年生徒全員が二十歳を迎えた卒業後3年目の春に催される「成人の集い」だが、今年は過去最高の120名超が参加するという。卒業式後、同窓会の諸先輩方にお引き合せいただき、実行委員の当日の役割やその後の同窓会活動についてご説明いただいたのが丸二年も前ということに時の流れの早さを感じ、久しぶりに集う面々の変化に興味と多少の不安を抱き、会場へ着く。実行委員は一足先に集合したのだが、彼らのあまりの変化の無さには安心したが、拍子抜けしてしまったというのはここだけの話。

だがそんな思いは見事に覆された。続々と集まる同級生には大いに驚かせてもらった。服装や髪の色など一目瞭然の違いから、よもや目の色鼻の高さは変わっている者はいなかったが、話す口ぶりが明るくなった者が多かった気がするのは我が身のことのように嬉しいことであった。

しかしそれ以上に私を驚かせたのは同級生の皆が要所要所で円滑な会の進行に協力してくれたことだった。会場入り口でのささやかな会費の支払いの際にはスムーズに会計を済ませ、入口付近にたまることも無く、次々と入場していたし、開宴前の記念撮影では会場のセットの移動を手伝ってくれるものも多く、整列にも時間を取られることが無かった。在学時代は当たり前だったこととはいえ、卒業後整列する機会などおよそ無かったにも拘らず、この手際のよさを見せつけられたのだ。本郷での六年間、三年間の経験が生かされているといって間違いないだろう。

会場の皆がビールを手に取り乾杯をして始まった宴では、クラスの仲間や部活動の仲間等で集まって立食の卓を囲む者もいれば、恩師の先生方にご挨拶に伺う者もいた。卓から卓へと渡り歩けば離れていた二年間という時間など踏み越えてしまったかのような親しみが私たちを包み込んでくれるのだ。近況について語り出すことが多かったが、話す方も聞

く方も二言三言交わせば銀ボタンの詰襟を着た二年前と何ら変わらない会話のやり取りが進んでいく。この肩肘張らない付き合いが末永く続くことを願ってやまない。

また例年通り今年も多くの恩師がお忙しい中駆けつけて下さった。同級生は皆近況報告をしたい上に、どうやら先生方の中には思い出当時には語れなかったことなどをお披露目したいという思いを持ってお越しになる方もいらっしゃるようで、「確かにそんなことありましたね」、「そんなこと思っていらしたんですか！」とここでは書き散らせないような話も飛び交っていたようである。それにしても先生方というのは実に記憶力たくましい方々である。当人らはすっかり忘れているような、また忘れておきたいようなことまで覚えていらっしゃるのだから、集まる同級生たちの中にはにこやかながらも内心戦々恐々としていたものもいたのではないだろうか。

卒業してしまえば、自分と親しかった者同士の間で個人的なやり取りをする以外、ましてや学年規模で人が集まる機会など滅多に無い。親しい間柄での付き合いはもちろんそれはそれで有意義であるが、思い出話をするにも出枯らしてしまうこともある。それが大勢集まると在学時代は縁遠かった者も久しぶりに会うことで、日々顔を突き合わせていなくとも少しの昔話が一つ一つの思い出として思い起こされるのだ。時間を踏み越えて非日常へと誘われることは、何だか自分自身が映画スターにでもなったかのような小気味のよさを感じる。私もついつい杯が進んでしまった。

ご存じのこととは思われるが、「成人の集い」は毎年同窓会の諸先輩方のご尽力で開催されている。このように愉しい機会をご用意いただきましたことには何度感謝申し上げて

も言葉が足りません。この場を借りて同窓会諸先輩方、理事長先生、校長先生、恩師始め学校関係の方々に改めて感謝させていただきますとともに、新同窓生であるご同輩諸兄には、成人の集いを支える源である同窓会費へささやかながらもお力添えさせていただこうではないかと呼びかけることで感謝の意を表したいと思います。

中学18回生（1945年＝昭和20年卒業）平成二十五年度本中十八会総会を終えて

志田 芳久

記録的な猛暑から解放され、爽やかな秋を迎えた平成二十五年十一月九日本中十八回総会を参加者二十名を迎えて開きました。

今回の総会は例年の教育会館の会場から母校に近く、巣鴨養和会スポーツセンターに変えて行われました。高橋正明君の司会により始められ、冒頭故菩提寺悦郎君以下五名の物故者の冥福を祈って黙とうを捧げました。続いて本会の継続に努力してこられた大塩会長の挨拶になります。「山寺の鐘の音響き渡る」と心境を極めて短く述べられたのが印象的でした。議事に入り岡田光男君から会計報告と監査報告がされ、承認されました。

続いて馬場隆君の講演に入り「私は銀行にいましたので金融や経済などが専門ですが、大学時代政治学科を専攻したこともあって、尖閣問題に興味があり勉強しました」と前置きして本論に入り、講演はレジメなど十五枚に及ぶ資料のもとで進められます。

尖閣についての歴史を辿ると、明治十二年、清の李鴻章が琉球の領土問題でアメリカの元大統領グラントに調停を依頼、その勧奨もあって日本は宮古島以南（尖閣も含む）を清国領とする分割案の仮調印まで行ったが、日清戦争の日本勝利でこの話はうやむやになってしまった。

明治二十八年一月十四日の閣議で尖閣諸島を日本領に組み入れる。そして明治二十九年政府は古賀辰四郎に尖閣を三十年間無償貸与することを決定。古賀はここでアホウドリの羽毛採取、鰹節の製造などの事業を行い最盛期には三〇〇人の人が居住した。

その後日本は太平洋戦争に敗れ、ポツダム宣言の受諾で領土問題について極めて不利な立場におかれた。従来中国は尖閣に全く関心がなかったが、1968年国連アジア経済委員会が尖閣付近に大量の石油埋蔵の可能性があると発表すると俄に尖閣の領有権を主張するように至った。

昭和四十六年六月十七日、日本とアメリカの間で沖縄返還協定が調印された。その際アメリカのスポーク

スマンは次のように述べている。「米国政府は日本と中国の間に尖閣の領有権を巡って争いがあることは承知しているが、施政権は日本に返すが、領有権に関しては米国は中立の立場をとる」と。これは返還に関する協定書ではなく口頭での意志表明であった。

こうした一時間一〇分の講演には常に正義感を基調にしながらも正確を期して事実を伝えようとした意図が伺えました。しかし、打開策があるのかと云うことになると「尖閣は日本の固有の領土でありそもそも領土問題は存在しない」とする日本政府の立場を固守すれば今後も打開の道は開けないと講演を聴いて感じました。

ここで再び岡田光正君が登壇し、税理士の立場から、平成二十七年から相続税の基礎控除引き下げに伴う、詳細な資料が提示されました。質問は後日ファックスでお願いしますとのこと。次に母校の同窓会の理事として次の事が述べられました。

我々の母校本郷学園の現状について、目下校舎の改築が行われており、地下二階には一〇〇〇名が収容できる講堂が完成する予定、地上五階は教室なります。最後に卒業生の有名校への進学率は年々増加しています。

以上のように母校の発展を喜ぶ報告が聞けました。これで総会が終わり記念撮影を挟んで懇親会に移りました。

懇親会は松廣翠君の司会、久しぶりに出席された野本昭君の乾杯の音頭で始められ、午後三時三〇分まで続き和やかな雰囲気のなかで閉会となります。閉会の締めは例年の通り大原功君の「ゴルフでエイジシューターを達成した」という近況も含めてユーモラスな締めでした。こうして平成二十五年度本中十八会総会は無事に閉会しました。年齢的にも殆どの友人が何らかの障害を抱えての出会いでした。それでもお互いを励まし合い、来年の再会を誓い合いました。（写真＝前列左から大沢善和、高柳昭三、佐々木一昭、

大塩宏一郎、馬場隆、新井義雄、高橋正明、後列左から志田芳久、岡田光正、松廣翠、野本昭、今里隆、檜垣順次、島田公雄、新井保文、大原功、岩渕正己、西野重義、鈴木卓三、渡部豊一君）

高校13回生（1961年＝昭和36年卒業）同期会

齋藤　毅

平成25年度の同期会を例年のごとく11月10日（日）にJR水道橋にありますホテルメトロポリタンエドモンドで開催しました。ちょうど母校で新校舎建設をしておりましたので、その見学を兼ねてと予定しておりましたが、工事中のため見学が出来ませんでした。

そのためでもないのですが参加者が多くはありませんでした。その分一つ一つの話題は全員で会話を交わすことが出来ました。話題の中心は在学中の思い出や恩師のこと・修学旅行での出来事及び年齢相応の体調管理など、毎年開催しておりますが話題は尽きないものがありました。

話題の終盤は現在の後輩のレベルが上がりそのレベルを我々が入学した当時に思いを巡らせると多分入試に落ちる者が出たと思われるなど現在の後輩に感謝する場面もありました。話は尽きることはありませんでしたが来年の再会を約し、今後益々の母校の発展を参加者全員で祈念し散会しました。

高校18回生（1966年＝昭和41年卒業）同期会

小倉　義雄

平成25年9月21日（土）、巣鴨の土風炉（とふろ）にて約3年振りに恩師の沢辺、坂井、田村先生もお呼びして、同期会を26名にて写真でも分かりますように、非常に楽しく近況報告や高校時代の話などをして、和気あいあいに過ごすことが出来ました。最初に最近逝去されました竹内君も含めご冥福を皆で祈

るため黙祷を致しました。また最後には、大きな声で本郷校歌を歌い、あっという間に1次会の3時間が過ぎました。私達も65歳を過ぎ、だいぶ健康の面でも心配しなければなりませんが、また皆元気で来年も開催しようと場所（同期生のお店）も予定しました。2次会も多数参加してカラオケなど歌い楽しく親睦を深めることが出来ました。ご参加して下さった皆様ありがとうございました。今後も常に本郷のことを忘れず、創立百周年に向け、本郷学園並びに同窓会のますますの発展を心よりお祈り致しております。

高校24回生（1972年＝昭和47年卒業）「還暦の集い」開催

野田 悠二

平成25年11月23日・16時より、巣鴨養和会パーティールームにおいて、本郷高校を卒業して42年「還暦の集い」を開催しました。恩師お二人（鈴木政一先生、板垣勝夫先生）をお迎えして、卒業生は18名、計20名が集まりました。式次第そっちのけで皆、懐かしさで会話がはずみました。約2時間の楽しい時間は、あっという間に過ぎてしまいました。最後に校歌を斉唱して、2次会に流れました。恩師お二人よりも、老け込んでいる生徒が何人もいました。

高校35回生（1983年＝昭和58年卒業）恩師の定年祝いを兼ねての同窓会

竹野谷 茂

母校を卒業して早いもので30年が経ち、今年50歳を迎える年齢になりました。

そんな中、昨年3月まで母校の教壇に立ち、めでたく定年を迎えた本郷のOBでもある小倉義雄先生を囲み、お祝いを兼ねて何人かに会おうと声を掛けたところ、連絡が付き予定が合う者が懐かしの巣鴨に参集しての小さな同窓会となりました。

当日は早めに巣鴨に到着して夕闇迫る母校のグラウンドを眺める者や、部活動の帰りに立ち寄った店など駅近くを散策する者、30年ぶりに顔を合わせる面々もありましたが、目を合わせると「誰？」とはならずに一瞬で分かり合えました。

酒宴も始まり先生も交えて各々が順番に近況などを話し、昔話に花が咲いていると、いつしか心は高校時代へ。

サッカー、ラグビー、ボート部などの活躍で本郷高校の名前が全国に知れ渡っていた時代を共に過ごし、土足で土埃が舞わないように水を撒いて授業を受けていた教室の事や、本郷初の海外・韓国への修学旅行の話など（それはまだ国の一部に夜間外出禁止令が出ていた時代の頃でした）杯を重ねるごとに、脳裏の片隅にあった記憶が次々と昨日の如く思い出され、笑い声、笑顔の絶えない本当に楽しい一時でした。

今やソーシャルメディアで容易に連絡が付く時代になり、消息が分かる者も増え、次回はより多くの出席者を期待して、皆元気に再会が出来る事を約束しての散会となりました。

時：平成25年11月23日（日）

「本郷医師の会」第1回親睦会のご報告

秋には2回目を企画

杉下 和行　高校48回生
（1996年＝平成8年卒業）

（写真：左から岡本先生、京坂先生、大谷先生、矢郷先生、金子先生、私、片桐先生、津田先生）

同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。昨年の本誌にて本郷医師の会の設立をご報告申し上げましたが、平成25年11月30日に第一回親睦会を開催いたしましたので誌面をお借りして皆様にご報告申し上げます。

会の冒頭に、本郷医師の会の会長でいらっしゃる岡本明久先生＝高校40回生（1988年＝昭和63年卒業）よりご挨拶をいただきました。本会設立の経緯からはじまり、岡本先生が在学されていた頃の本郷学園の思い出に及び、今後の医療情勢の見通しについてもお話いただきました。その後、各自が順次自己紹介を行った後、歓談していると、あっという間におひらきの時間になってしまいました。幹事長として小生より、お集まりいただいた先生方への御礼をこめてご挨拶をさせていただき散会となりました。

出席いただいた先生方をご卒業年次順にご紹介いたします。片桐崇文先生＝高校34回生（1982年＝昭和57年卒業）、大谷伸久先生＝高校39回生（1987年＝昭和62年卒業）、津田達広先生＝高校44回生（1992年＝平成4年卒業）、矢郷祐三先生＝高校48回生（1996年＝平成8年卒業）、金子駿太先生＝高校55回生（2003年＝平成15年卒業）、京坂朋来先生＝高校56回生（2004年＝平成16年卒業）です。

本年秋には、更に多くの本郷学園出身の医師の先生方をお迎えして第二回の親睦会を企画したいと思っておりますので、同窓の医師の方には、是非ともご連絡いただければ幸甚に存じます。

氏名、本郷学園の卒業年、出身大学、専門科目、現在の所属、電話番号、E-mailアドレス、メッセージなどを記載のうえ、E-mailにてご連絡ください。折り返しこちらからご返事を差しあげます。ご本人がこの「お知らせ」に気づかないこともあります。本郷出身の医師とお知り合いでしたら、ご一報いただけると助かります。

本郷医師の会会長：岡本明久（名古屋大学医学部卒）
幹事長：杉下和行（東京大学医学部卒）
本郷医師の会連絡先　E-mail: kasumicho86@yahoo.co.jp　杉下宛

2014年度 事業計画案

自・2014年4月1日　至・2015年3月31日

会員相互の意見と親睦

- 定期総会＝日時：6月21日（土）15時。会場：母校6号館2階会議室
- 総会後の会員懇親会＝日時：6月21日（土）17時。会費＝2，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 第7回「成人の集い」（高校64回生（2012年＝平成23年3月卒業）（卒業2年後に成人となるお祝の同期会）＝日時：5月10日（土）14時半。会費＝1，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 理事懇親会＝日時：4月19日（土）17時、10月18日（土）17時。会費＝2，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 本郷祭（学園文化祭）同窓会展示室（ブース）＝開設日：9月20日（土）、21日（日）
- 本郷祭同窓会懇親会（サロン）＝開催日時：9月21日（日）15時～17時。会費＝2，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 還暦の集いなど同期会の開催支援

会誌の発行

- 銀友43号＝発行日：5月1日。発行部数：15，000部。A5版

母校の後援

- 各分野における全国規模の大会等で活躍した生徒を表彰
- 卒業生全員に記念品贈呈
- 学業優秀な卒業生に「同窓会賞」贈呈

会員名簿の整理

- 名簿管理にともなう新会員（卒業生など）・住所変更の登録、会費納入者・物故者の記録および「銀友」用原稿作成など必要な各種事務処理＝業者に委託

ホームページの管理

- 同窓会行事の告知・開催報告ならびに更新、既刊を含む同窓会誌「銀友」の転載、住所変更受け付け、同期会等の開催告知・報告掲載など

その他の事業

- 学園との懇親会開催
- 入学・卒業式、体育祭など学校行事への役員代表の出席、参観

会議の開催

- 理事会＝日時：4月19日（土）15時、10月18日（土）15時。会場：母校6号館2階会議室
- 運営委員会＝日時：4月9日（水）14時、5月10日（土）12時、6月21日（土）13時、7月19日（土）15時、9月6日（土）15時、10月18日（土）13時、11月15日（土）15時、12月20日（土）15時、1月17日（土）15時、2月21日（土）15時、3月

14日（土）15時。会場：母校教室

- 第8回「成人の集い」〈高校65回生（2013年＝平成25年3月卒業）〉実行委員会＝日時：2月21日（土）13時。会場：母校教室
- 第10回「成人の集い」〈高校67回生（2015年＝平成27年3月卒業）〉実行委員会結成＝日時：3月14日（土）13時。会場：母校教室

―同窓会からのお願い―

年会費納入にご協力ください
一口：2，000円以上
同窓会の運営はすべて皆様の会費で行っております。
振込取扱票を同封しております。

2014年度収支予算案

2014年4月1日～2015年3月31日

科　目	収　入	科　目	支　出
前年度繰越金	2,349,566	総会（1回）、理事会（2回）開催・資料費	200,000
新卒者同窓会入会金	3,000,000	会誌発行費（15,000部）	2,800,000
同窓会年会費	2,400,000	銀友制作費	
成人の集い	330,000	宛名印刷費	
会費	130,000	ラッピング費	
学校側負担金	200,000	発送費	
本郷祭同窓会懇親会費	100,000	編集諸経費	
雑収入	100	行事部門	1,940,000
		成人の集い（第7回）	500,000
		成人の集い（第8回）	100,000
		本郷祭同窓会出展費	200,000
		本郷祭同窓会懇親会費	100,000
		同窓会開催支援費（活性化）	100,000
		活躍した生徒への激励費	500,000
		卒業生記念品費	150,000
		卒業生同窓会賞費	40,000
		学園懇親会費	200,000
		父母の会交歓会費	50,000
		会員名簿保守管理費	250,000
		ホームページ年間契約料	70,000
		運営委員会交通費補助	170,000
		事務費	200,000
		備品費	
		消耗品費	
		資料作成費	
		雑費	
		支出合計	5,630,000
		次年度繰越金	2,549,666
合　計	8,179,666	合計	8,179,666

2013年度 事業報告

自・2013年4月1日　至・2014年3月31日

会員相互の意見と親睦

- 定期総会＝日時：6月15日(土)15時。会場：母校会議室
- 定期総会後の会員懇親会開催＝日時：6月15日(土)17時。参加者数：50人。会費2，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 第6回「成人の集い」〈高校63回生(2011年＝平成23年3月卒業)〉＝日時：5月18日(土)14時半。参加者数：157人(63回生126人、理事長・校長・担任教諭など学園関係者18人、同窓会関係者13人)。会費＝1，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 理事会後の理事懇親会開催＝日時：4月20日(土)17時、参加者数：23人。10月19日(土)17時、参加者数：20人。会費＝2，000円。会場：三菱養和会「巣鴨スポーツセンター」内
- 本郷祭(学園文化祭)同窓会展示室(ブース)開設＝開設日：9月21日(土)、22日(日)。会場：母校4号館2階高3―8・9教室
- 本郷祭同窓会懇親会(サロン)開催＝日時：9月22日(日)15時。参加者数：70人。会費＝2，000円。会場：「巣鴨スポーツセンター」内

会誌の発行

- 「銀友」42号＝発行日：5月1日。発行部数：15，000部。A5版

母校の後援

- 各分野における全国規模の大会等で活躍した生徒58人(9件)を表彰
- 卒業生全員310人に記念品として印鑑を学園ならびに父母の会と共同で贈呈
- 学業優秀な卒業生8人に「同窓会賞」を贈り表彰

会員名簿の整理

- 名簿管理にともなう新会員(卒業生など)・住所変更の登録、会費納入者・物故者の記録および「銀友」用原稿作成など必要な各種事務処理＝業者に委託

ホームページの管理

- 同窓会行事の告知・開催報告ならびに更新。既刊を含む同窓会誌「銀友」の転載。住所変更受け付け、同期会等の開催告知・報告掲載など

その他の事業

- 学園との懇親会開催＝同窓会より13人参加。日時＝12月4日(水)18時より。会場：「巣鴨スポーツセンター」内。学園側からは理事長、常務理事、校長、副校長、高・中教頭、母校OB教諭(同窓会担当)、事務職員が参加。
- 入学・卒業式、体育祭など学校行事への役員代表の出席、参観：新校舎(2号館)落成式への役員代表の出席

会議の開催

- 理事会＝日時：4月20日（土）15時、10月19日（土）15時。会場：母校会議室
- 運営委員会＝日時：4月20日（土）13時、5月18日（土）12時、6月15日（土）13時、7月20日（土）14時、9月7日（土）14時、10月19日（土）13時、11月16日（土）14時、12月21日（土）15時、1月18日（土）15時、3月15日（土）15時。会場：母校教室および会議室。
- 第7回「成人の集い」（高校64回生（2012年＝平成24年3月卒業）実行委員会＝日時：2月22日（土）13時。会場：母校教室
- 第9回「成人の集い」（高校66回生（2014年＝平成26年3月卒業）実行委員会結成＝日時：3月15日（土）13時。会場：母校教室

2013年度収支決算報告書

2013年4月1日～2014年3月31日

科　目	収　入	科　目	支　出
前年度繰越金	2,738,343	総会（1回）、理事会（2回）開催・資料費	227,570
新卒者同窓会入会金	3,100,000	会誌発行費（15,000部）	2,716,346
同窓会年会費（927人）	2,473,380	銀友制作費	1,453,250
成人の集い	589,236	宛名印刷費	124,468
会　費	157,000	ラッピング費	251,107
学園側負担金		発送費	794,866
2012年度	221,136	編集諸経費	92,655
2013年度	211,100	行事部門	2,033,446
本郷祭同窓会懇親会費	112,000	成人の集い（第6回）	596,107
雑収入	166	成人の集い（第7回）	53,040
		本郷祭同窓会出展費	172,884
		本郷祭同窓会懇親会費	179,730
		同期会開催支援金（活性化）	83,240
		活躍した生徒への激励費	580,000
		卒業生記念品費	155,000
		卒業生同窓会賞費	32,000
		学園懇親会費	181,445
		父母の会交歓会費	0
		会員名簿保守管理費	299,642
		ホームページ年間契約料	66,760
		運営委員会交通費補助	176,000
		事務費	143,795
		備品費	0
		消耗品費	105,363
		資料作成費	0
		雑費	38,432
		2号館完成お祝い金	1,000,000
		予備費	0
		支出合計	6,663,559
		次年度繰越金	2,349,566
合　計	9,013,125	合　計	9,013,125

預貯金･現金明細

銀行・他	預貯金残高	定期預金	次期繰越金
三菱東京UFJ銀行	2,197,095	0	
郵貯銀行	13,076	0	
現　金	139,395		
合　計	2,349,566	0	2,349,566

監査　篠喜三郎･木塚順夫

2013年度 表彰記録

各分野における全国規模の大会等で活躍した生徒58人(9件)を表彰

1. 第64回関東中学校ラグビーフットボール大会」に出場＜木下隆介、古野裕理、鳥飼昌寛、落合勇太、君島健介、宮里祐、福田陽己、鈴木健介、世良光、島崎陸生、斉藤陸、佐竹優樹、染野紘輝、下山遼恭、小岩井陽介、中村健裕、中谷晋、八條郁、佐藤公紀、高澤賢次、栗山寛裕、遅沢瞭、渋谷勇輝、田中大暉、奥澤公次郎君＞

(25人:6月4日表彰)

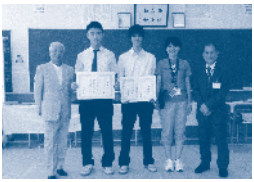
2. 「World Scholar's Cup 2013 Global Round in Dubai」に参加＜(高校)駒井恵太君＞
(6月12日表彰)

3. 「物理チャレンジ2013　第2チャレンジ」に出場＜(高校)佐藤健史、渡邊伊吹君＞

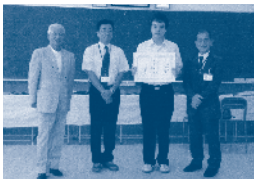
4. 「アジアサイエンスキャンプ2013」に出場＜(高校)桐野将君＞

(以上2件3人、7月20日表彰)

5. ジュニア・アチーブメント日本主催の「ビジネスアイデアコンテスト」において準優勝し香港開催の国際大会に参加＜(高校)山田裕己、中山海誠君＞



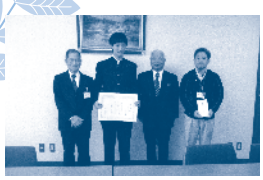
6. 「化学グランプリ2013」に参加し銀賞を受賞＜(高校)ドル有生君＞



7. 「平成25年度第44回関東中学校サッカー大会」に出場＜樋口尊也、服部祐汰、山下将吾、上野真、杉崎達也、下西完太、森郁登、八所佑馬、間嶋諒太朗、楠優輔、内藤泰介、齋藤尚紀、笹原慎太朗、熊岡京太、黒田晃生、田中奨、藤間真之輔、谷中涼祐君＞

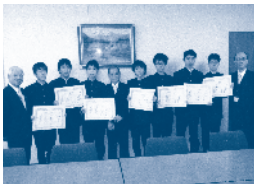
(以上3件21人、9月21日表彰)

8. 日本代表として「2013年フェシング(エペ)コペシハーゲンカデサーキット」に出場、129人中24位に＜(高校)西沢樹君＞



(11月27日表彰)

9. 日本物理学会第10回Jr.セッションにおいて「非円形の空気砲の渦輪について」を発表し、優秀賞を受賞＜(高校)渡邊伊吹、鷹取夏輝、園悠希君＞。同じく「蝋燭の炎のメカニズムの解明」を発表＜(高校)野村直生、三保尚太、松原遼太郎、三上紘史君＞



(7人:3月15日表彰)

2013年度定期総会報告

山際幸雄　高校18回生（1965年＝昭和41年卒業）

日　時：2013年（平成25年）6月15日（土）
会　場：母校会議室
出席者：50名

司会の野田悠一理事（高校24回生＝昭和47年卒業）が開会を告げ、次いで同窓会の物故者に黙祷をささげる。

松平頼武理事長、北原福二校長、南谷修同窓会会長（高校8回生＝昭和31年卒業）のあいさつに引き続き議事に入る。

会則により議長を南谷会長が務め、議長の指名により小室能広副会長（高校8回生＝昭和31年卒業）、山際幸雄理事（高校18回生＝昭和41年卒業）が書記を務める。

第1号議案　理事・役員人事の件

議長から、別紙総会資料1頁「本郷学園同窓会役員（案）」（「銀友」42号36頁掲載）が提案され、秋元幹夫副会長（高校7回生＝昭和30年卒業）が説明し、9人の理事就任を全会一致で承認した。

第2号議案　2012年度事業報告の件

議長から、別紙総会資料2頁「2012年度事業報告」（「銀友」42号30頁掲載）が提案され、秋元副会長が各事業の概要を報告し、さらに個別の事業について担当役員が報告した。

第3号議案　2012年度収支決算の件

議長から、別紙総会資料5頁の「2012年度収支決算報告書」（「銀友」42号31頁掲載）が提案され、斉藤毅副会長（高校13回＝昭和36年卒業）が説明した。なお、篠喜三郎監事（高校6回生＝昭和29年卒業）が4月27日（土）に行った2012年度会計監査について「会計処理は公正かつ妥当なものである」と報告し、これを了承した。

ここで第2号、第3号議案を諮り、いずれも全会一致で承認した。

第4号議案　2013年度事業計画（案）の件

議長から、別紙総会資料6頁の「2013年度事業計画（案）」（「銀友」42号28頁掲載）が提案され、秋元副会長が説明した。

第5号議案　2013年度収支予算（案）の件

議長から、別紙総会資料7頁の「2013年度収支予算案」（「銀友」42号29頁掲載）が提案され、斉藤副会長が説明した。

ここで第4号、第5号議案を諮り、いずれも全会一致で承認した。

第6号議案　報告事項

別紙総会資料8頁（「銀友42号35頁）の本郷祭のアンケート集計、本郷医師の会（「銀友」42号23頁）、第6回成人の集い（「銀友」42号17頁）、別紙総会資料9頁の学園だより（本郷高校2013年大学入試合格実績＝「銀友」42号37頁）について担当役員が報告した。

このあと、出席者からの発言が懇談的にあり、玉川昭副会長（中学19回生＝昭和20年卒業）が閉会の辞を述べ、終了した。

本郷学園同窓会役員（案）

任期：2015 年度定期総会まで
○印は 2014 年度総会で承認を得る

名誉会長			
	松平頼武	（学園理事長）	
会　長			
	南谷　修	高校 8 回生	1956（昭和 31）年卒
副会長			
	玉川　昭	中学 19 回生	1945（昭和 20）年卒
	秋元幹夫	高校 7 回生	1955（昭和 30）年卒
	小室能広	高校 8 回生	1956（昭和 31）年卒
	井上栄三郎	高校 10 回生	1958（昭和 33）年卒
	市倉洋一	高校 12 回生	1960（昭和 35）年卒
	斉藤　毅	高校 13 回生	1961（昭和 36）年卒
監　事			
	篠喜三郎	高校 6 回生	1954（昭和 29）年卒
	木塚順夫	高校 8 回生	1956（昭和 31）年卒
顧　問			
	北原福二	（学校長）	
	中村　允	中学 13 回生	1940（昭和 15）年卒
	山内英夫	高校 3 回生	1951（昭和 26）年卒
相談役			
	宮本幸雄	中学 15 回生	1942（昭和 17）年卒
	植松隆吉	高校 3 回生	1951（昭和 26）年卒
運営委員			
	新澤米次	高校 8 回生	1956（昭和 31）年卒
	山際幸雄	高校 18 回生	1966（昭和 41）年卒
	梶　徳治	高校 20 回生	1968（昭和 43）年卒
	赤井健郎	高校 22 回生	1970（昭和 45）年卒
	野田悠二	高校 24 回生	1972（昭和 47）年卒
	立入健司	高校 26 回生	1974（昭和 49）年卒
○	米澤　潤	高校 32 回生	1980（昭和 55）年卒
	野口貴洋	高校 35 回生	1983（昭和 58）年卒
理　事			
	高野正美	中学 17 回生	1944（昭和 19）年卒
	岡田光正	中学 18 回生	1945（昭和 20）年卒
	前田和男	中学 18 回生	1945（昭和 20）年卒
	野木惣市	中学 19 回生	1945（昭和 20）年卒
	田島利男	中学 20 回生	1947（昭和 22）年卒
	望月敏郎	高校 3 回生	1951（昭和 26）年卒
	地曳秀雄	高校 3 回生	1951（昭和 26）年卒
○	津久田愛之助	高校 6 回生	1954（昭和 29）年卒
	岡本信也	高校 10 回生	1958（昭和 33）年卒
	上本清治	高校 10 回生	1958（昭和 33）年卒
	久保國男	高校 12 回生	1960（昭和 35）年卒
	熊木宏治	高校 12 回生	1960（昭和 35）年卒
	山本達雄	高校 12 回生	1960（昭和 35）年卒
	竹村義教	高校 12 回生	1960（昭和 35）年卒
	阿出川信夫	高校 13 回生	1961（昭和 36）年卒
	池田雅彦	高校 14 回生	1962（昭和 37）年卒
	高田隆義	高校 15 回生	1963（昭和 38）年卒
	杉山勝正	高校 15 回生	1963（昭和 38）年卒
	小倉義雄	高校 18 回生	1966（昭和 41）年卒
	関塚正治	高校 20 回生	1968（昭和 43）年卒
	野水国一	高校 20 回生	1968（昭和 43）年卒
	富岡俊明	高校 21 回生	1969（昭和 44）年卒
	中田守喜	高校 21 回生	1969（昭和 44）年卒
	加納耕助	高校 22 回生	1970（昭和 45）年卒
	染谷幸雄	高校 22 回生	1970（昭和 45）年卒
	池野直樹	高校 23 回生	1971（昭和 46）年卒
	田中良一	高校 24 回生	1972（昭和 47）年卒
	千野邦雄	高校 25 回生	1973（昭和 48）年卒
	平野隆之	高校 26 回生	1974（昭和 49）年卒
	立石嘉男	高校 28 回生	1976（昭和 51）年卒
○	矢作　明	高校 31 回生	1979（昭和 54）年卒
	遠藤千秋	高校 33 回生	1981（昭和 56）年卒
	山本一博	高校 34 回生	1982（昭和 57）年卒
○	佐々木晋一	高校 37 回生	1985（昭和 60）年卒
	佐藤和明	高校 39 回生	1987（昭和 62）年卒
	移川真男	高校 42 回生	1990（平成 2）年卒
	下村大樹	高校 45 回生	1993（平成 5）年卒
	野村竜太	高校 46 回生	1994（平成 6）年卒
○	新野文隆	高校 46 回生	1994（平成 6）年卒
	庄野直哉	高校 47 回生	1995（平成 7）年卒
	荻山温夫	高校 56 回生	2004（平成 16）年卒
	池田貴生	高校 57 回生	2005（平成 17）年卒
	金尾晋一郎	高校 58 回生	2006（平成 18）年卒
	黒部直樹	高校 58 回生	2006（平成 18）年卒
	御子柴怜志	高校 58 回生	2006（平成 18）年卒
	岡本健太郎	高校 59 回生	2007（平成 19）年卒
	高宮成将	高校 59 回生	2007（平成 19）年卒
	田中大貴	高校 59 回生	2007（平成 19）年卒
	石田　武	高校 60 回生	2008（平成 20）年卒
	塩野智也	高校 60 回生	2008（平成 20）年卒
	西村友吾	高校 60 回生	2008（平成 20）年卒
	宮島大貴	高校 61 回生	2009（平成 21）年卒
	佐藤明彦	高校 61 回生	2009（平成 21）年卒
	柳田　将	高校 61 回生	2009（平成 21）年卒
	松井洋輔	高校 61 回生	2009（平成 21）年卒
	吾郷友紀	高校 62 回生	2010（平成 22）年卒
	山田　駿	高校 62 回生	2010（平成 22）年卒
	若林　司	高校 62 回生	2010（平成 22）年卒
	植草太郎	高校 63 回生	2011（平成 23）年卒
	佐藤祐介	高校 63 回生	2011（平成 23）年卒
	関田宗範	高校 63 回生	2011（平成 23）年卒
	宇賀直道	高校 64 回生	2012（平成 24）年卒
	手島秀則	高校 64 回生	2012（平成 24）年卒
	中村建介	高校 64 回生	2012（平成 24）年卒
	北野史浩	高校 65 回生	2013（平成 25）年卒
	熊谷太輝	高校 65 回生	2013（平成 25）年卒
	白石慎太郎	高校 65 回生	2013（平成 25）年卒
	田口雄飛	高校 65 回生	2013（平成 25）年卒
	畑本麻斗	高校 65 回生	2013（平成 25）年卒

2013年度　本郷祭報告

野口 貴洋
高校35回生
1983年（昭和58年）卒業

2013年（平成25年）度の本郷祭は『Re：Start（再出発）』をテーマに9月21日（土）、22日（日）開催

ゲートの左右には本郷OBの漫画家・曽山一寿さんが制作した本郷祭マスコットキャラクター「ホンゴドリ」があしらわれていました

同窓会の展示室（ブース）を4号館2階の3年8・9組教室に開設

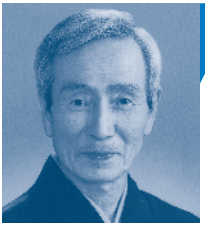
現役生徒への表彰記録、社会で活躍する卒業生の経歴を紹介

卒業アルバムを熱心に見つめる眼差し、OBも小学生も変わらないのが微笑ましい

22日の同窓会懇親会（サロン）

現役生徒の応援団が駆け付けてくれた

活躍する生徒たちを表彰



一噌（旧・東王地）仙幸 さん
高11回
1959（昭和34）年卒業

1940年生まれ。能楽師笛方。一噌正之助の次男。能楽囃子一噌流を藤田大五郎に学び、1954年（昭和29年）初舞台。

1982年（昭和57年）日本能楽会会員。2008年（平成20年）能楽の秘曲・三老女などの卓越した笛演奏で芸術院賞及び恩賜賞を受賞。同年（2008年）紫綬褒章受章。

2009年（平成21年）重要無形文化財総合指定保持者（人間国宝）に認定される。

囃子方【はやしかた】

日本音楽の用語。能と歌舞伎で用いられる。能の囃子方は四拍子（しびょうし）とも称し、笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方で構成され、各楽器とも分業制度が守られ、他楽器を兼ねることはない。それぞれの楽器には流派がある。現在、笛方には一噌流・森田流・藤田流の3流が、小鼓方には幸流・幸清流・大倉流・観世流の4流が、大鼓方には葛野流・高安流・石井流・大倉流・室生錬三郎派の4流1派が、太鼓方には観世流・金春流の2流がある。

北原 照久 さん
高19回
1967（昭和42）年卒業

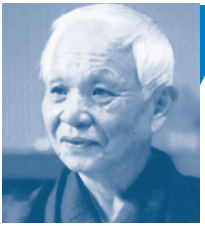
1948年生まれ。東京都中央区出身の玩具コレクター。

20歳から始めたコレクションはブリキのおもちゃをはじめとして、真空管のラジオ、カメラ、ポスター、現代アートに至るまで多岐にわたる。

1986年株式会社トーイズを設立。株式会社トイズプランニング社長。

ブリキのおもちゃ博物館、北原コレクションエアポートギャラリー、河口湖北原ミュージアム、箱根北原ミュージアムの館長を兼務している。「開運！なんでも鑑定団」（テレビ東京系列）などテレビ出演、講演、海外でのイベントなどで幅広く活躍中。

する卒業生



亀井 忠雄 さん
高12回
1960（昭和35）年卒業

1941年生まれ。能楽師　葛野流大鼓方。1949年（昭和24年）7歳で初舞台。1994年（平成6年）観世寿夫記念法政大学能楽賞（第15回）を受賞。

昭和57年日本能楽会会員。国立劇場伝統芸能伝承者育成「能楽（三役）」研修養成主任講師。

2002年（平成14年）重要無形文化財総合指定保持者（人間国宝）に認定される。2004年（平成16年）紫綬褒章受章。2012年（平成24年）旭日小綬章受章。

【人間国宝】

日本の文化財保護法第71条第2項に基づき同国の文部文化大臣が指定した重要無形文化財の保持者として各個認定された人物を指す通称である。文化財保護法には「人間国宝」という文言はないが、重要無形文化財保持者を指して人間国宝と呼ぶ通称が広く用いられている。

秋本　治 さん
高24回
1972（昭和47）年卒業

1952年　東京都葛飾区生まれ。漫画家。

1976年「こちら葛飾区亀有公園前派出所」が週刊少年ジャンプ（集英社）に掲載されデビュー。2001年に第30回日本漫画家協会賞大賞、2005年には第50回小学館漫画賞審査特別賞を受賞。

2005年8月、「こち亀」の発行部数1億3000万部突破し、浅草神社に石碑が建立された。

2007年には連載1500回を突破、単行本は160巻を超えるなど、歴史的ロングヒット商品として高い知名度を得ている。

村上　隆 さん

高３２回

１９８０（昭和５５）年卒業

１９６２年　東京都板橋区出身。日本の現代美術家、アーティスト。

１９９３年（平成５年）東京藝術大学博士後期課程修了、博士（美術）。自らの作品製作を行うかたわら、芸術イベント『GEISAI』プロジェクトのチェアマンを務め、アーティスト集団『カイカイキキ（KaiKai　Kiki）』を主宰し、若手アーティストのプロデュースを行うなど、活発な活動を展開している。

１９９８年（平成１０年）カリフォルニア大学ロサンゼルス校美術建築学部客員教授。

２００６年（平成１８年）、芸術選奨新人賞受賞。

２００８年（平成２０年）米Timeマガジン（世界で最も影響力のある１００人）に選出された。

２０１０年（平成２２年）フランスのベルサイユ宮殿で作品展『ＭＵＲＡＫＡＭＩ　ＶＥＲＳＡＩＬＬＥＳ』が開催された。

２０１３年（平成２５年）４月、初監督の映画作品『めめめのくらげ』が公開された。

飯田 弘之 さん

高３３回

１９８１（昭和５６）年卒業

１９６２年生まれ。日本将棋連盟プロ棋士六段。

山形県西村山郡西川町出身、本郷在学中からプロ棋士を目指し奨励会に入会、１９８３年に四段に昇格し、将棋のプロになる。

１９８７年頃から将棋とコンピュータの関係に興味を持ち、東京農工大学でコンピュータ将棋の研究を始める。

２００５年から北陸先端科学技術大学院教授。コンピュータ将棋を主とした計算科学としてのゲーム研究を行っている、自身の研究チームではコンピュータ将棋ソフト「TACOS」を開発している。

社会で活躍

原　哲夫 さん

高３３回

１９８１（昭和５６）年卒業

１９６１年　東京都渋谷区生まれで埼玉越谷育ち。漫画家。

代表作に「北斗の拳」など、緻密な絵と、度量に広い「漢（おとこ）」、敵味方を越えた友情、暑苦しいまでの醜悪な顔をした悪党、悪党があげる奇抜な断末魔の悲鳴を描くことで知られる。

「北斗の拳」は１９８３年連載開始以降、驚異的な人気を誇り、８０年代の『週刊少年ジャンプ』を支えると同時に、ジョジョの奇妙な冒険、魁!!男塾、ろくでなしBLUES等、後の漫画界の作風、タッチに多大な影響を与えた。

「花の慶次 雲のかなたに」「蒼天の拳」、引き続き「いくさの子織田三郎信長伝」の執筆を開始し、連載中である。

北島 康介 さん

高５３回

２００１（平成１２）年卒業

１９８２年生まれ。５歳から東京ＳＣで水泳を始め、本郷在学中に２０００年シドニーオリンピックに出場１００ｍ平泳ぎ４位入賞。２００２年アジア競技大会１００ｍ平泳ぎ金メダル・２００ｍ平泳ぎ金メダル（２分０９秒９７　世界記録）、２００３年世界水泳選手権１００ｍ平泳ぎ金メダル（５９秒７８　世界記録）・２００ｍ平泳ぎ金メダル（２分０９秒４２　世界記録）。

２００４年アテネオリンピック男子平泳ぎ１００ｍ・２００ｍ金メダル、４００ｍメドレーリレー銅メダルを獲得。

２００８年北京オリンピックでも男子平泳ぎ１００ｍ・２００ｍでも両種目で金メダルを獲得し、競泳での日本人初となる２種目２連覇という快挙を成し遂げました。

２０１２年ロンドンオリンピックでは４００ｍメドレーリレーで銀メダル獲得。日本競泳史上初のオリンピック３大会連続メダル獲得を果たしました。日本コカコーラ所属。

学園だより

本郷高校 2014 年大学入試合格実績

大学名	計	現役
国公立・大学校		
東京	9	8
京都	4	3
一橋	7	6
東京工業	9	7
北海道	6	3
東北	3	2
大阪	1	1
筑波	3	3
千葉	4	3
埼玉	1	1
東京外国語	1	1
東京学芸	3	2
東京農工	5	4
電気通信	9	9
首都大学東京	3	2
横浜国立	9	7
金沢	1	
信州	1	1
茨城	1	1
宇都宮	1	1
群馬	1	1
山口	1	1
福島県立医科	1	
宮崎	1	
防衛	2	2
防衛医科	3	3

大学名	計	現役
私　立		
早稲田	154	131
慶応義塾	118	92
上智	67	53
東京理科	135	113
明治	127	104
青山学院	18	13
立教	63	44
中央	59	41
法政	77	63
学習院	17	9
成蹊	10	4
成城	5	2
明治学院	21	11
日本	83	69
専修	9	6
東洋	13	6
駒澤	19	13
獨協	8	8
國學院	8	4
武蔵	7	3
神奈川	4	4
玉川	3	1
大東文化	6	4
東海	6	2
亜細亜	1	1
帝京	7	4
拓殖	5	3
東京経済	11	9
国際基督教	4	3
東京都市	9	5
芝浦工業	26	21
神奈川工科	1	1
関西	1	1
関西学院	1	
北里	7	5

大学名	計	現役
私　立		
杏林	7	2
近畿	1	1
工学院	4	3
埼玉医科	2	
産業能率	2	1
自治医科	1	1
順天堂	2	2
昭和	4	1
聖学院	1	
多摩美術	1	1
千葉工業	2	1
鶴見	2	1
帝京平成	1	
東京医科	3	
東京工科	1	1
東京工芸	2	2
東京国際	2	2
東京慈恵会医科	1	1
東京造形	1	1
東京電機	7	4
東京農業	15	14
同志社	3	2
東邦	4	3
日本医科	3	2
日本歯科	2	
文教	1	1
星薬科	1	1
武蔵野	3	3
目白	1	
ものつくり	1	1
立命館	7	4
愛知医科	1	1
福山	1	
松本歯科	1	

（2014 年 4 月 7 日現在）

2013 年度退職教職員

国語科　三好　耕二
家庭科　山根理智子
理　科　山野　康史

学園理事 退任にあたって

中津川 直昭

この3月末をもって本郷学園理事を退任いたしました。平成12年に縁あって学園の役員に就任し、以来14年間勤めさせていただきました。その間、同窓会の皆様方には多方面にわたりご指導賜り厚く御礼申し上げます。とりわけ歴代の会長、並びに役員の皆様方には大変お世話になり誠に有難うございました。

特に6年前から始めていただいた成人を祝う会並びに部活動等に活躍した生徒たちへの同窓会褒賞は卒業生、生徒にとって大いに励みとなり同窓会と学園の一体感がより高まったものになりました。また個人的には同窓会80周年記念行事で四国旅行に参加させていただきましたが、松平家ゆかりの各地を訪問するなど思い出に残る大変楽しい旅でした。

年々私学を取り巻く経営環境は厳しさを増していますが、その中にあって本郷中学・高等学校並びにもみじ幼稚園は入学入園希望者が多く、外部から高い評価を頂いていることは教職員の絶え間ない努力に加えまして卒業生の皆様方のご支援の賜物であります。こうした学園の発展に共に関わらせていただけたことは望外の喜びであります。人工芝グラウンド、新4号館そして今年1月に完成した新2号館の改築など昔の本郷の面影が消えてしまいましたが、長年の懸案であった教育環境の整備に微力ながら関わることができたことは一生の思い出になる貴重な経験でした。

これからの日本は国際化、情報化、エネルギー問題、少子高齢化などの難題に取り組んで行かなければなりませんが、これらの難題に果敢に取り組み解決を図る人材の育成、まさに「国家有為の人材を育てる」ことが求められています。自分で考え忍耐強く実行できる人間の教育、本郷の伝統である強健、厳正、勤勉の精神であります。本郷の生徒諸君を見ていますと、必ずやいずれ社会で活躍しまた同窓会活動に積極的に参加する卒業生がたくさん出てくることを確信します。良き先輩として後輩の励みになる良循環が生まれることでしょう。

約3万名の会員からなる同窓会との連携は学園にとりまして今後共大切にしなければならないものです。道半ばで学園を去ることになりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。最後になりますが同窓会の益々のご発展と皆様方のご健勝を祈念いたしております。長い間有難うございました。

本郷学園同窓会 会費納入者一覧

2014年（平成26年）3月31日現在

卒業回期　氏名（敬称略）

中3
宇田川 嘉勇
中7
林 繁之
中10
田口 赫郎
中11
市川 雄一
中野 武正
中12
釼持 行雄
坂口 甫
中13
阿部 敏一郎
太田 恭二
景山 正隆
小森 為郎
鈴木 和男
橘 正道
中村 允
山口 一弘
中14
柴崎 甲子夫
森本 三郎
中15
阿部 敏秋
荻原 久雄
勝 敬二
竹中 節男
中村 美登
根本 卓光
宮本 幸雄
吉田 正
中16
大沢 欽一
木村 宮造
小永井 暹
白井 明
樋代 幸雄
森 恭久
鶴見 俊一
中17
阿出川 昭治
秋田 禮一
大村 雅通
尾前 広
佐藤 元徳
下村 多気夫
土屋 二郎
寺口 有喜公
益田 泰彦
水田 裕昭
山口 登
藪田 幸一
和気 修
中18
安達 正治
新井 義雄
新井 保文
青戸 将
五十嵐 宏
今里 隆
岡田 光正
大原 功
大沢 善和
加藤 宣夫
笠原 栄治
佐々木 一昭
志賀 誠一
志田 芳久
清水 正美
島田 公雄
鈴木 卓三
高橋 三郎
鳥飼 義二
友安 昭治
西野 重義
野本 昭
長谷川 忠也
馬場 隆
松廣 翠
松田 裕
松島 寿夫
武藤 泰夫
森 正徳
矢部 博康
渡部 豊一
中19
阿出川 義男
新井 忠彦
浅原 義久
大久保 武司
大野 勝弘
貝塚 明雄
柏原 英一
菊田 勇
下川 敬朗
鈴木 孝一
玉川 昭
高三郎
高橋 實
永井 四郎
西村 努
野木 惣市
保谷 六郎
増田 速水
室久 敏三郎
市川 恒雄
中20
大屋 忠
大塚 康夫
佐藤 昌雄
鶴岡 俊雄
中島 敬太郎
羽山 健児
橋本 公成
久永 幸隆
山下 保次
伊澤 芳雄
市川 保
菊入 喜三郎
鈴木 三好
宮本 良一
中21
阿知波 健
板倉 厚
大下 晃
大矢 和夫
柄澤 喜市
小林 國雄
鈴木 完
高原 隆雄
二宮 重恒
根本 幹弘
古澤 秀信
藤田 隆
星野 昌弘
横澤 邦彦
田中 昭二
井筒 千秋
中22
高田 政雄
野々村 長三
高1
外内 悦雄
堀井 幸次郎
高2
小倉 雅文
坂野 重一
桜井 磯雄
櫻井 泰
稲田 稔
瀬川 澄男
高橋 東洋一
豊嶋 敬司
西島 成一
羽生 銈佑
浜野 清隆
宮入 貞雄
高3
石川 達夫
遠藤 亘良
奥平 博一
北見 尹
志野原 三津夫
佐々木 三郎
齊藤 邦衛
坂田 実
地曳 秀雄
長崎 一
根本 強
光安 伸夫
望月 敏郎
山口 洋司
山内 英夫
吉田 孝光
高4
篠 二郎
八嶋 政臣
佐々木 直剛
高5
相島 康彦
井沢 清
市村 近
梶野 伸二
片桐 幸一郎
島崎 雄司
谷川 洋明
宮坂 貢司
山崎 利恭
高6
稲垣 泰輔
池内 春俊
漆間 秀雄
奥村 茂
小椋 一
柏村 喜徳郎
蔵田 尚
駒井 隆行
後藤 順夫
小林 金則
篠 喜三郎
霜越 佶

会費納入者一覧

鈴木 惣一郎
関 貞三
仙波 忠志
高橋 民次郎
高木 桂三
津久田 愛之助
寺田 栄一
中山 壽夫
中村 義一
根立 光夫
林 秀次
松本 易夫
松本 幸司
渡辺 勝
渡辺 昭義
香森 哲也
市川 錦次郎
安食 僖三
秋元 幹夫
青木 輝男
大島 正巳
酒井 征彦
鈴木 健
高橋 三郎
福原 信夫
益川 雄治
宮崎 靖司

高7

茂木 進
山内 周
稲葉 研治
今仁 猛一
小幡 昌久
小野寺 博
大木 昭一
大野 俊広
尾島 圭亮
角能 良宣
金子 隆一
木塚 順夫
小室 能広
新澤 米次
勅使河原 宏記
長澤 秀幸
西田 稜雄
長谷川 猛
古屋 勝正
深澤 宏之
藤巻 健三
藤本 昭夫
前田 武彦
宮本 佳明
三村 孝一
南谷 修
山本 賢一

高8

吉田 光男
渡邊 茂明
綿貫 正壽
芥川 定義
江原 森太郎
風間 幹雄
川崎 孝
小林 常甫
佐藤 左武郎
島村 泰夫
田中 好明
田辺 博昭
西江 正晴
比企 正憲
青木 弘三
井上 栄三郎
泉澤 賢一
岡本 信也
小川 紘
亀井 俊一
金子 二郎
上岡 光男
上本 清治
佐藤 光雄
大門 貞雄
田中 秀明
津原 巌

高9

中河 秀行
林田 有弘
星野 隆
松本 恭一
山崎 昇
八木橋 実
横澤 慶治
渡部 長幸
佐々木 範行
山崎 尚
太田 善夫
小池 弘祐
阿久津 二三男
伊奈 信行
市倉 洋一
飯田 典幸
江原 稔
大梶 勝英
亀井 忠雄
喜多 雄三
木村 尤一
久保 國男
久保田 晴夫
熊木 宏治
鈴木 教司
高好 俊一
竹村 義教

高10

高11

高12

田島 輝夫
中田 和男
西野 保博
向井 史朗
山本 達雄
吉原 孝哉
阿出川 信夫
相川 清
明石 安邦
上田 浩一
岡田 勲
岡本 武勝
大島 康臣
加毛 隆
方波見 茂
越路 往輝
斎藤 毅
中村 久
野間口 正機
渡辺 則綱
芦原 健一
山口 俊章
櫻居 義臣
杉山 雅一
杉山 勝正
高田 隆義

高13

高14

高15

高16
上島 敏幸
小原 治男
田村 邦光
池田 明
佐藤 仁
辻内 健志
中村 憲夫
山田 隆
秋山 隆利
浅井 俊一
石津 彰三
板倉 日出男
小倉 義雄
黒石 清
小松 良栄
榊原 康夫
酒井 秀樹
斉田 与四郎
神田 茂夫
丹波 信三郎
田原 克人
根木 輝久
宮沢 正喜
三浦 淳二
村井 文一
山際 幸雄
吉尾 正照

高17

高18

高19
秋葉 和秀
石原 崇光
金子 敏雄
坂寄 吉昭
中村 博
沼尻 卓
長谷川 実
増山 恵一
武藤 昇
吉倉 幸信
我妻 光久
内山 正敏
大野 英治
梶 徳治
小林 基展
斎藤 盛泰
酒井 完治
酒井 孝一
塩原 一男
関塚 正治
瀬崎 正憲
津田 隆
戸張 友晴
中野 正博
蛭田 要司
平塚 孝
古川 和夫

高20

古畠 英俊
本間 孝
松原 茂
町田 準一
宮田 英一
森田 知男
矢代 順一
良川 眞
小菅 邦雄

高21
荒井 章登
菊地 正美
黒杉 寿博
杉山 敏行
杉山 利博
鈴木 英世
中田 守喜
野田 優明
早川 盛男
小野寺 清二
森田 議雄
山口 陽通
渡辺 守

高22
赤井 健郎
遠藤 達哉
岡村 光雄
加納 耕助
木下 寛明

工藤 勝章
蔵田 昌明
瀬賀 春雄
土井 幸雄
森田 茂
若杉 清和

高23
鹿島 茂夫
砂泊 照男
菅野 邦彦

高24
石原 渉
掛川 敏行
小松 康孝
進藤 久幸
田中 良一
中村 敬司
野田 悠二
松島 和己

高25
金子 鉄也
春日 貞男
栗山 孝治
佐野 養
坂井 成一
田島 秀行
千野 邦雄
中田 宗喜
長谷川 幸雄
松井 一彦

山口 登

高26
稲田 俊和
笹沼 博之
相模 明男
立入 健司
戸部 庄次
中田 久人
庭野 毅
花島 良晴
堀 義一

高27
松平 善明
岩崎 充晃
河野 哲史
佐藤 吉伸
鈴木 利一
高橋 伸治
畠山 恒明

高28
井口 隆
亀山 孝安
小門 淳一
小林 博貴
須崎 幸彦
田中 実
萩原 宏次
松井 伸彦

高29
伊東 史郎
飯泉 彰裕

島 幸男
菅野 弘一
玉置 健
丹野 修辞
田中 和男
藤井 信雄
横山 鉄夫

高30
上荒 敬司
川崎 雅弘

高31
石坪 英貴
佐藤 修一
富永 浩伸
杉林 正敏
馬溪 文有
橋本 尚弘
矢作 明
山畑 邦裕
吉田 法夫

高32
石原 剛次
板津 茂幸
小池 治
竹内 博輝
永堀 義秀
原 哲夫
三井 良文
三友 宏樹

高33
青木 和夫

天沼 嘉章
礒田 浩之
岩田 実
宇賀神 茂
遠藤 千秋
奥田 十善
小口 邦夫
斎藤 卓
滝本 学
戸谷 庸克
中野 一美
並木 成中
西 洋一
福島 浩
山崎 勝也
吉田 浩久
吉田 秀樹

高34
明妻 正道
小林 晋一郎
澤登 弘
林 俊明
平澤 淳
宮崎 雄一
渡辺 欣也

高35
藤本 由紀夫
山崎 剛
諸石 貴生

佐々木 昭夫
茂呂 孝元
江利川 吉彦
小池 武次
佐々木 一宏
戸張 元
江原 啓之
野口 貴洋
増岡 武宏

高36
粂谷 信久
美谷島 総
加藤 吉郎
下鳥 豊
若林 宏幸
杉本 淳
田邊 賢一
新井 信夫
酒井 信之
鈴木 貴生
直井 正人

高37
加藤 雅彦
久保 一樹
荒井 康雄
小松 貴昭
小野寺 和彦
大熊 勝雄
根岸 延存

秋山 竹史
横川 高樹
佐藤 純幸
城 和夫
前沢 智敏
島田 哲三
内山 建造

高38
箭内 洋史
柴山 巌
磯貝 敏幸
岩城 俊一
山田 史朗
高木 淳
守屋 健一
大野 秀樹
古賀 直樹
中尾 政則
梶 晋介

高39
清水 伸樹
関原 利通
春日 真人
矢嶋 実

高40
金子 純一朗
篠原 史孝
上木 武夫
重川 孝志
上田 一人

会費納入者一覧

丸山 義則

高41
小掛 慎太郎
渡邊 雄一郎
秋庭 健一
紙谷 淳一
中村 光英
長田 祐司
高瀬 知博
細田 昌孝
井上 貴行
川島 雅之
林 慎也

高42
花田 憲彦
水野 哲行
三村 淳悟
田村 伸也
東尾 隆之
吉川 秀一
藤原 潤一
大澤 清
藤田 恵輔
石本 健太郎
塩家 吹雪
萩原 孝明

高43
伊藤 正規
松本 祐一
戸塚 太一

上原 弘行
中田 一郎
吉田 永弘
木村 秀樹
中村 歩希
今井 仁
野口 拓栄
藤田 清志
北村 彰浩

高44
久保村 豊
守部 直文
藤田 啓
浅野 裕之
津田 達広
中原 洋介

高45
赤田 正樹
稲葉 賢治
青木 和久
中野 隆之
近藤 正徳
高木 功介

高46
北澤 卓弥
野村 竜太
青江 覚峰

高47
大森 慎太郎
香取 範充
佐藤 良

林 幹大
粟根 忍
板橋 寿和

高48
稲生 雄一郎
古見 高広
町田 健
林 誠吾
安井 督
上野 光信
中溝 健晴
豊川 浩成
浜野 吉明
宇田川 太
御園生 悟
清水 貴寛
綱島 宗介
新村 光央
野村 耕太郎

高51
梶野 貴経
菅原 大介
佐藤 英明
新井 亮輔
中村 元気
斉藤 国彦
滝澤 一晴
行木 達朗
中澤 利幸

橋爪 雄志
乙丸 貴史
染谷 快典
古島 剛
若西 良介
高橋 智久

高52
塩畑 太一
藤本 耕平
鈴木 常太
千田 昌宏
坂本 泰宏
坂田 憲和
落合 祐之
猪越 正直
吉村 和幸

高53
今井 秀星
吉田 朋大
中井 秀昌
福森 洋輔
奥山 雄太
齊藤 秀雄
小藤 寛之
田口 英俊
中村 旭
日谷 尭
高辻 紘之
内原 嘉昭

後藤 泰治
丸山 大輔
深山 敬大
川邊 崇仁
根岸 達哉
早野 慎太郎

高54
栗野 耕平
石澤 慧
吉澤 順一朗
高橋 祐磨
大澤 思朗
池田 達彦
江間 裕樹
大森 秀昭
鵜木 学
小泉 孝人
土橋 篤仁
小幡 圭一
川井 絢矢
戸澤 信太郎
和田 敏治
小泉 信吾
正木 健彦
香川 景睦

高55
内丸 剛郎
新村 佳央
加藤 誉幸

大河内 伸剛
佐藤 裕明
塚田 匡
大塚 真弘
白坂 健太

高56
高井 俊宏
稲垣 雄介
殿川 洋右
船渡川 哲
松田 将吾
川田 大助
菅原 一輝
小高 真樹
卯坂 潤一郎
後藤 隆徳
長谷川 裕之
山本 崇史
木内 健義
栗田 直亮
田中 佑介

高57
谷口 遼
安藤 裕哉
宮本 英明
北森 雅雄
石村 賢
宮川 元
池田 一樹

高58

松島 和人
米山 俊輔
秋本 悠樹
田中 義輝
西原 正浩
金尾 晋一郎
木下 和俊
梅田 翔太
宮沢 祐太
岩本 健史
小笠 貴嗣
黒田 健斗
益田 晃太

高59
鷲澤 仁志
小泉 隼人
野中 裕太郎
水谷 大志
山本 勝章
森井 康博
山下 雄大
林 輪太郎
松本 康佑
南 洋佑
宇山 宗孝
小堀 一
春山 輝亘
村川 東

長谷川 喜教
吉實 大輔

高60

福田 修也
宮崎 聡樹
矢吹 卓大
高井 航
星野 慎太朗
小林 英資
曾谷 祐貴
松丸 大輝
吉田 玲生
浅野 泰寛
石井 洋志
小池 康介
鳥居 暁
中村 聡志
佐野 純平
岸 拓真
正木 直哉
山幡 琢也
小幡 将久
中山 雄平
黒田 直生人
山本 陸
吉田 成輝
宇津木 純一
小穴 泰裕

高61

河内 達也
髙橋 良平
花村 大樹
福田 圭祐
横田 久顕
岩丸 和弘
町田 修
森下 弘基
岡野 晴行
川野 雄平
陣場 成行
杉浦 貴則
中村 耕大
花村 駿
廣瀬 尊郎
大倉 智裕
加藤 彰
中田 匠哉
藤岡 遼
木下 雄登
志村 暢紀
田中 慎也
前波 知輝
村田 貴輝
渡邊 貴之
日下 知紘
大崎 駿一

金子 修
志田 龍太郎

高62

柳 裕介
安藤 雄太
伊藤 健太
春原 裕樹
林 洸太
南方 宙大
渡辺 学嗣
酒井 翔生
篠崎 一貴
山田 駿
岡本 遼
金 晟徹
増田 陽平
大澤 亜希良
平田 雅俊
大場 朗生
兵頭 義章
宮島 誠也
秋元 陽祐
小林 祐樹
櫻井 佑樹
中島 瑞
福嶋 大樹
小山 拓郎
周 達仁

高63

櫻井 寛己
木塚 康太
木原 健裕
土屋 雄飛
山川 哲理
齊藤 峻
津内 直人
篠田 肇
三好 亮麻
鴨下 海太
塩澤 広基
清水 聡
郡司 宰
秋山 裕輔
關田 宗範
宮島 開

高64

岡村 健太郎
齋藤 佑貴
篠崎 宏洋
花井 博貴
髙橋 幸佑
髙橋 颯平
中澤 翔伍
西山 朔
阿部 優
香中 天青
黒木 勇志朗

坂井 俊一
武藤 祥史
宇賀 直道
松本 一起
吉田 涼平
江原 慶介
河野 遼
齊藤 慧
槇田 耕伸
石橋 拓也
梅田 諒太
丸山 優貴
望月 秀人
大島 悠理
新井 聡一郎
竜野 真悟
保賀 俊哉
浅見 笙太
土田 岳永
幸田 陽一朗
櫻井 幹生
申 俊利
関口 昌孝
田中 孝士郎
苦瓜 治彦

高65

荒川 啓
石川 貴博

日野 貴裕
吾孫子 拓実
荒井 理
髙松 純一朗
田口 雄飛
小谷田 宏紀
古谷田 悠太郎
田村 正毅
永野 友基
米田 健寛

回期不明

若林 稜大
永山 祐司
松永 啓佑
須藤 大介
星加 紘生
新井 達也
石崎 太聖
小代 圭祐
川崎 浩平
溜 俊太郎
外山 倫太郎
藤森 良太
菊池 敦至
小林 弘樹
瀬町 崇浩
村上 新
井上 智皓

倉地 宏明
関本 圭吾
花村 広樹
上田 武蔵
梶間 諒
重本 大地
須田 祥功
髙荒 大明

サイトウ マサカズ
スズキ サダオ
カミオカ ノブユキ
タケザワ タダシ
スズキ ヤスヨシ
スギヤマ ヒロシ

不明者

カイインバンゴウ
ナカ)サ19カイセイ

※万全を期したつもりですが、万が一、お名前の漏れや誤字、脱字などの間違いがありましたらご容赦ください。FAXでご一報いただければ幸甚です。
FAX 03-3917-0007

訃報

謹んでご冥福をお祈り致します

同窓会にご連絡のあった方のみ掲載しております

中3回　宇田川　嘉勇
中4回　沢部　政直
中11回　上田　義雄
中11回　茂呂　豊
中13回　有賀　武彦
中13回　岡野　善太郎
中13回　黒鳥　四朗
中13回　公平　勇
中13回　高田　甚蔵
中13回　武田　豊
中13回　山田　重隆
中13回　花里　八郎
中13回　本田　明
中13回　山口　明
中14回　丸　信雄
中15回　野村　秀二

中15回　萩原　友郎
中17回　北隅　栄一
中18回　織田　栄晤
中18回　松田　裕
中22回　小林　喬
高10回　鈴木　富士彦
高10回　田中　延幸
高12回　進藤　健
高12回　鈴木　教司
高12回　田中　功
高18回　竹内　信治郎
高21回　近藤　友宏
高24回　海老沢　良造
高25回　倉谷　広良
高33回　斉藤　弘
高37回　土田　賢一

編集後記

■ 同窓会の伝統行事になりつつある「成人の集い」。昨年は卒業生の4割を超す126人が参加してくれました。歓談の輪が広がる模様を關田さんが「時間を越えた銀ボタン」としゃれたタイトルで、実況放送のようにいきいきとつづってくれました。そのなかで、集いの進行に率先して協力する仲間たちの姿を「本郷での六年間、三年間の経験が生かされているといって間違いないだろ」と、学園の生活指導のなかで身に付けた生活態度の一端に、さらりと触れているのが印象に残りました。

■ 同窓会では、全国規模の大会に出場、参加した生徒を独自で表彰しています。
毎年の生徒たちの活躍が楽しみですが、昨年度は9件、58人を表彰しました。なかでも、日本物理学会Jrセッションで発表するなど科学部のメンバーの活躍が目立ちます。顧問の石川理先生には日本物理学会から「物理教育功労賞」が贈られました。

■ 「本郷医師の会」の第1回親睦会の報告が幹事長の杉下さんから届きました。親睦会は「あっという間におひらきの時間になってしまいました」と。この秋には2回目の親睦会を行うとのことです。ご盛会をお祈りいたします。ところで今年の大学入試で、本郷高校の医学部医学科の合格者は36人を数えました。ちなみに2013年は37人、2012年36人、2011年40人です（いずれも入試合格の人数で入学した人数ではありません）。

■ オリンピックでのメダルが期待できるアスリートを支援するチーム「ニッポン」マルチサポート事業の競泳部門に携わる岩原さんから原稿が寄せられました。岩原さんは、水泳でオリンピック連覇の北島康介選手を支えた「チーム北島」のメンバーです。それにしても、銃を構えた警備員が立つ大会なんて、日本では考えられませんが、その警備員の厳しい監視の目をかいくぐって仕事を続ける“ふてぶてしさ”には感心させられました。

銀友

第43号　2014年　5月1日発行　本郷学園同窓会

本郷学園校歌

むかしは植樹の名どころ染井
とりわけ紅葉の錦に知らる
今は学園ここに開けて
国の柱の苗木を育つ
ああわれら　誇りの本郷学園

ああ柱苗木の青年われら
つとめば未来に何えせざらむ
さらば固めよ処世のもとい
こころは剛毅に身は強健に
ああわれら　誇りの本郷学園

作詩　坪内逍遥
作曲　信時潔

本郷祭（学園文化祭）を同窓生交流の場に

－9月20日（土）、21日（日）－

同窓会展示室の開設（当日のプログラムでご案内します）

《当日は同期会･クラス会･OB会などの集合場所にご利用ください》

同窓会懇親会の開催　9月21日(日) 15:00～17:00

会場：三菱養和会巣鴨スポーツセンター2階「レストランパルテール」

会費：2,000円　　※ 展示室で利用券を受け取りご参集ください

発行責任者　南谷　修　〒170-0003　東京都豊島区駒込4-11-1　本郷学園内
同窓会へのお問い合わせはFAXにてお受けします。　FAX：03-3917-0007